

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

歴史の中のストリートとトランスローカリティ：
歴史と記憶を生きる眼差しから見る現代の場所性：
歴史の中のストリート概念の変遷：
近代を相対化する深い場所（垂直性）：
北京の小さな橋：街角のグローバル・ヒストリー

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 妹尾, 達彦 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001207

ただし、「清明上河図」の場面がどの場所をさすのか、という点については、「清明上河図」自体に場所をしめす記述はないので、今でも一致した見解はない。宋代の实在の都市ではなく、想像上の都市を描いたものであるという見解も根強く、少数ではあるが、開封の城内ではなく、開封から離れた地方の市場町を描いていると考える研究者もいる。また、開封城内には入らず、城外の風景だけで終わっているとする考えもある。

多くの研究者は、開封の城内外の情景を描いた絵とするが、開封のどの場所を描いたかについて共通の理解はまだない。場所比定の論拠となる画中の木造アーチ橋と城楼（城門）が、どこなのか見解が分かれるのである。

一般的な見解では、開封の東南部分の汴河沿線の情景を、城外から城内にかけて描いたとするものである。その見解では、図16・図17に描かれた木造アーチ橋を外郭城外の虹橋に比定する場合が多い（図15の①説）。一方、図中の城楼は、外郭城の城門ではなく内城東南の角子門を指し、図中のアーチ橋を外郭城内の土土橋とする考えもある（図15の②説）²²⁾。さらに一説では、開封の東南部の情景ではなく、西城壁の西水門の外の横橋から城内にかけての景観を描いており、絵の方角も、東南部を描いたとする従来の見方とは逆に、絵図の下方が北の方角で、上方が南になるとする（図15の③説）²³⁾。

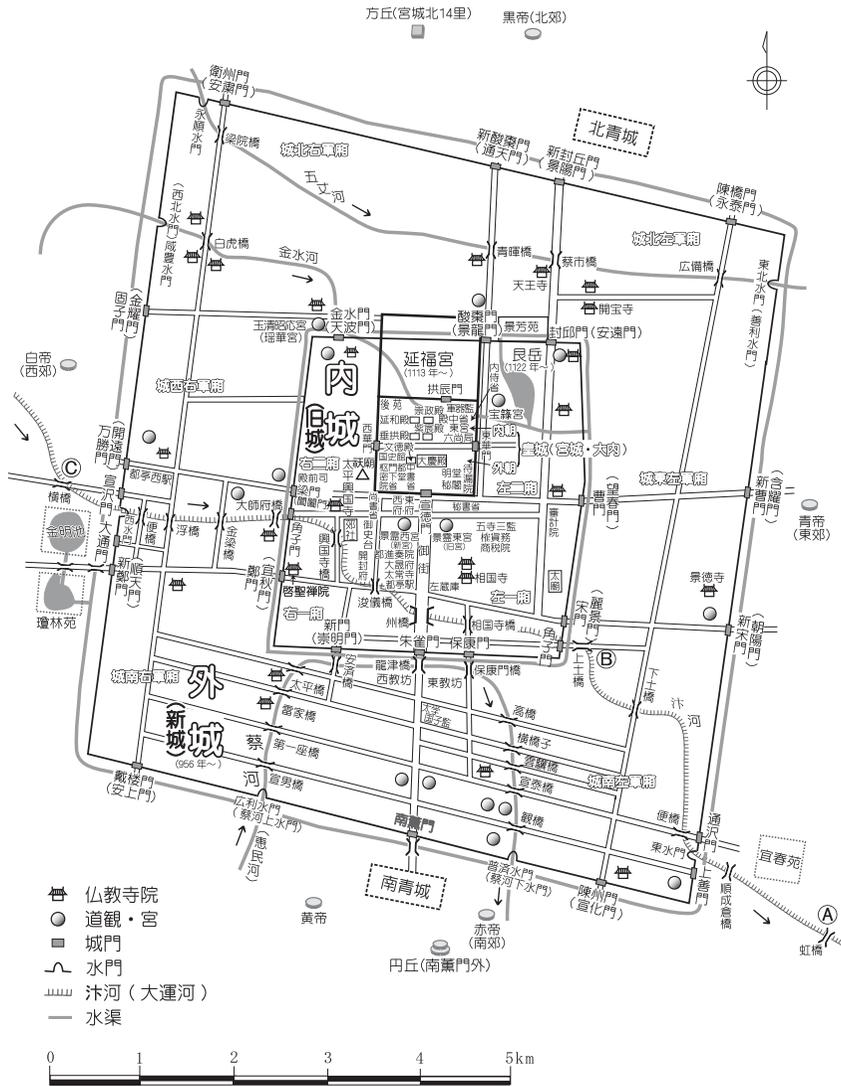
本稿では、結論を急がず、単に、北宋の開封が隋唐の洛陽を越える水の都となり、内陸水運の活用によって中国都城の立地と構造を刷新した様が、「清明上河図」に見事に描きこまれている点に注意をうながすにとどめたい。

水運に依拠する開封の特色を受け継ぎさらに進展させた都が、南宋の都城の臨安（杭州）である。臨安は、東を銭塘江と杭州湾、西を西湖にはさまれた、大運河の終点/起点をなす都市だった。大運河は、北の城門から城内に入り、倉庫の建ちならぶ湖岸を経て、都市の南北軸を御街と平行に流れ、都城の中心部に城内最大の繁華街をつくる（李志庭・楼毅生 1986: 325-347; 斯波 1988: 312-363; 陳述 2006）。臨安にいたって、初めて、海路・水路・陸路の3つの交通路の交差する都城が、中国大陸に誕生した（図11 ①臨安）。大運河の河流を都城内に引き込んだ開封と臨安の都市構造は、元大都に、より大規模な形で再現される。

2.18. 海岸通りの誕生

中国大陸における農業-遊牧境界地帯から沿海地帯への都市網の転換は、経済・政治・社会すべての構造の転換をうながした。都市網の転換は、商品経済から貨幣経済への転換や、分権型の政治体制から集権型の政治体制への転換、神々と自然とともにあった世界から人間が独立する世界への転換をもたらしたのである。

経済の面でいえば、水は浮力をもつゆえに、大量の重い物品を比較的安全に運ぶことが可能であった。水運は陸運に比べて3分の1から4分の1ほど安く、さらに、海運は水運よりも7、8割安く運送できた（Needham 1971; 斯波 1993: 10-15）。



「清明上河図」の木造単孔アーチ橋の位置：①説「虹橋」、②説「上土橋」、③説「横橋」
 円丘・方丘・青帝・赤帝・黄帝・白帝・黒帝の祭壇の正確な位置は不明である。

図 15 北宋（960-1127）末期の開封—清明上河図の時代—（妹尾 2008）

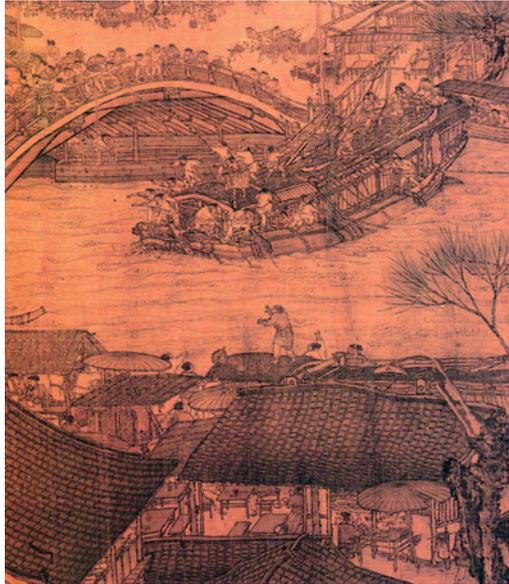


図16 北宋の都・開封の運河沿いの情景—「清明上河図」から—

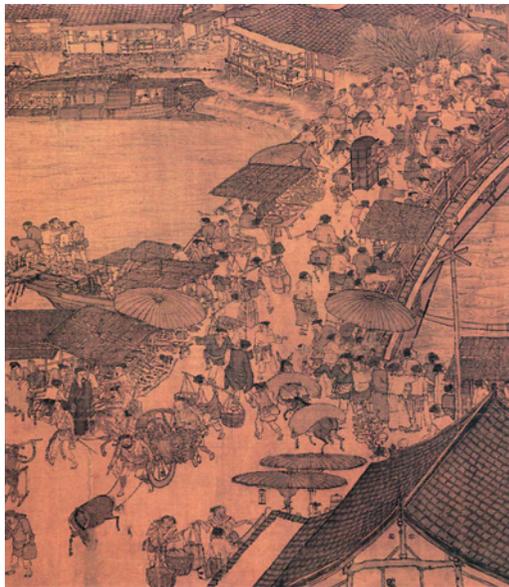


図17 開封の橋（上図）の情景—「清明上河図」から—

このために、水路交通は、貿易品の対象を奢侈品から大衆品に転換させて貿易規模を拡大させ、貨幣・信用経済の隆盛うながすことになった。とりわけ、海路における地球規模の貿易の拡大は、消費者側の需要を重視する貿易構造から、生産者側が力をもつ供給を重視する貿易構造への転換を可能とさせた（Chaudhuri 1997）。

政治の面でいえば、水路・海路の活用は、多大の物産・情報の周流の中に誰もが抱きこまれる状態をうながして、個人の心に権力が浸透することを容易にした。特定の富裕層を対象としていた、内陸型の貿易構造にもとづく政治体制とは質の異なる、個人を組み入れる集権的な政治体制の形成を可能にさせたのである。

世界認識の面からいえば、生態環境の制約をうけるラクダ等の家畜にたよる内陸交通と異なり、生態環境に左右されない船という人造の交通手段の普及が、人間の主体性を強め、世界認識の転換をもたらすのである。

道路や橋の通行空間のもつ意味も、陸路から水路・海路への主要幹線の転換にともなって変化していった。すなわち、農業-遊牧境界地帯をはさむ都市網が交通の幹線をなす前近代では、道路は、異なる環境の世界をつなぐ媒体であり、神々や自然と交感できる空間だった。しかし、内陸水路時代を経て沿海部の港湾都市の近代に入ると、河岸都市や港湾都市の道路は、あらゆる場所に大衆の日常品を流通させる通り道となり、社会の同質性を高める交通の血管として、人間のものとなったのである。

大都市の河岸通りや、港湾都市の海浜に面する海岸通りは、このような世界史の転換の結果うまれた。貴族や富豪、商人が往来する内陸部のキャラバン・サライのある隊商路と異なり、河岸通りや海岸通りは、世界中の物品が大衆レベルで入手でき、誰もが手の届きそうな異国情趣に満ちた空間になったのである。河岸通りや海岸通りの景観は、沖を通航し波止場に停泊する多数の船舶や、積み上げされる貨物の倉庫、荷役・貿易会社の商館、銀行が建ちならび、河川と海と陸を結ぶ開放的な雰囲気こそなっていた。公共空間である河岸通りや海岸通りを散歩する行為は、近代を象徴する。

近代社会の特色は、とりわけ、海岸通りに集約される。中国大陸の場合、海岸通りが誕生するのは、西欧都市の海岸通りが移植される、19世紀になってのことだった。上海の外灘（わいたんBand）や、広州の沙面、香港の香港島の中環や九龍半島の尖沙咀などのイギリス植民地に、西欧人のための海岸通りが建造された。上海の外灘は、海に通じる河川の西岸にできているので、厳密に言えば海岸に直接面した通りではないが、外洋船が停泊できるので、広い意味での海岸通りといえよう。

1907年に、上海の蘇州河と黄浦江の合流地点にできた鉄橋のガーデンブリッジ（現在の外白渡橋）は、中国の長い道路の歴史の中で、港湾都市の沿岸交通網が地球の物流と人間の交流の主役になったことを象徴するモニュメントであった。都市を象徴する橋は、自然素材でつくる前近代の内陸水路の石造橋や木造橋から、近代の大規模な鉄橋にとって替わられるのである。

以上のように、本節では、明代初期の北京の改造にともない銀錠橋が誕生する歴史的背景を、アフロ・ユーラシア大陸の歴史を鳥瞰しながら検討してきた。要するに、銀錠橋は、内陸水運と沿海海運が始まる時代を背景に誕生し、南朝に開花した江南の庭園都市の様式を北京に再現する動きの中で建造された。娯楽性を全面におしだした世俗的な橋であることが、銀錠橋の特色である。次節では、この銀錠橋と北京の歴史の関わり合いを、微視的な視角から探っていきたい。

3 北京の歴史は、銀錠橋の水辺に映しだされる

銀錠橋の歴史については、高巍・孫建華等著『燕京八景』（2002: 217-230）の「“城中第一佳山水——銀錠観山”」の箇所がよくまとまっている。また、湯用彬・陳声聡等編著、鐘少華点校『旧都文物略』（1986: 148）を始めとする北京旧聞叢書の各冊や、段柄仁主編『什刹海』（2005: 104-106）などに、銀錠橋の来歴に関する記述が散見する。しかし、管見の限り、まだ銀錠橋の歴史を分析する専論は存在しないようである。

そこで、本節では、従来の銀錠橋についての叙述をふまえて、より広い視野から、銀錠橋の歴史を詳細に整理してみたい。

3.1. 銀錠橋が生まれる前——金の太液池

前海と後海をつなぐ現在の銀錠橋は、第1節の「銀錠橋界隈の歴史」で簡単に述べたように、明代第3代皇帝・永楽帝（在位 1402-1424）と第5代皇帝・宣徳帝（在位 1425-1435）による北京改造の際、元代の積水潭が3分割された時に誕生した。それ以前の遼・南都や金・中都、元・大都の時代には、銀錠橋はまだ存在しない。ここでは、銀錠橋が誕生する経緯をより詳しく述べ、銀錠橋を生み出した世界史の流れを再整理してみたい。

現在の北三海、すなわち、前海（什刹前海）・後海（什刹後海）・西海（什刹西海）は、南三海（北海・中海・南海）とともに一続きの湖沼地帯であった。もともと、この湖沼地帯は、河北最大の海河の水系に属する永定河の河道の一部であった。おそらく、前8世紀から前1世紀頃の気候温暖期に、永定河の主流が南方に流路を変えたことにより、現在の什刹海は永定河の一支流の流れる湖沼地帯として、華北平原の中に取り残された（蔡番 1987; 王偉傑・任家生・韓文生・馬振玉・李鉄軍編 1989: 47-52; 侯仁之・鄧輝 1997）。

この湖沼地帯が、都城の庭園として整備されるようになるのは、ツングース系の女真族がたてた金王朝（1115-1234）が、五京の1つの中都（奠都期間 1153-1215）を、この湖沼地帯の南方に建造してからである。金王朝は、この風光明媚な湖沼地帯の南岸に中都を建築した。その際に、この湖沼地帯を白蓮潭と称して、その湖岸に夏の離宮・太寧宮を建造したのである。永定河の河水がつくった湖沼地帯が、都城の庭園として整備さ

れる歴史は、ここに始まった(図2⑧金中都)。

金朝の中都は、契丹族^{キタイ}の遼王朝(916-1125)の南京・析津府^{セキシんふ}を改造したものである。遊牧民である契丹族や女真族は、華北平原の北端に位置する三方を山に囲まれたこの湖沼地帯を、駐牧の地として気に入り、華北の農業地域を支配し経営する拠点としたのである。湖沼地帯から灌漑用水を引いて稲田も造成している。金は、湖沼地帯の水路を活用して、中都と中都東郊の通州を結ぶ運河を2つ開削し、元の大運河開削の基礎をつくった(脱脱等編『金史』巻28, 河渠志, 漕渠 1975: 682-686; 于傑・于光度編 1989: 143-146; 侯仁之・鄧輝 1997: 70-73)。

湖沼地帯に臨む太寧宮は、金の皇帝や支配者のための夏の離宮として造成され(冬は南京〈開封〉の宮殿に居住)、湖沼地帯は、漢代や唐代の都城の禁苑の湖の名称を踏襲して太液池と称されるようになった。太液池は、金の第6代皇帝・章宗(在位 1189-1208)によって燕京八景の1つに選ばれ、「太液秋波(太液池の秋のさざ波)」の風景でよく知られる景勝地となった(蔣一葵『長安客話』巻1, 皇都雜記 2001: 14)。

3.2. 元・大都の建造と積水潭^{せきすいたん}の誕生

13世紀に金を倒した元王朝は、金の中都の東北に位置するこの太液池を冬営地に定め、太液池を中核に、1267年に、新都の大都を建造することにした。大都は、モンゴル高原の南端に位置する夏の都・上都(夏営地)に対して、冬の都(冬営地)として位置づけられた。大都が、中国の伝統的な都城とは異なり、クビライの率いる遊牧騎馬軍団の冬営地を核に造営された経緯は、杉山正明氏の研究に詳しい(杉山 2004: 139-167)。

元の支配層は、農業-遊牧境界地帯の北端に位置する上都と、南端に位置する大都を、南北に季節移動することで、農業地域と遊牧地域の両方にまたがる広大な空間を統治したのである。ただし、元王朝の皇帝たちは、大都城内には居住せず、東方の狩猟地に天幕を張ってすごすのが普通だったという(杉山 2004: 145)。元大都は、遊牧政権の都城として、農業地域出身の政権の都城とは異なる独自性に満ちていた²⁴⁾。

元大都は、金の太液池を皇城の北壁で二分割し、皇城内の太液池と、皇城外の積水潭に分け、それぞれの湖水に引いた水渠も別々に建造した(図2⑨元大都)。金・太寧宮の置かれていた場所に建造された元の皇城は、遊牧民支配者の空間であった。元朝の為政者は、太液池をはさんで、東岸にモンゴルのカアンが居住する宮殿、西岸に皇后と皇太子の居住する宮殿をそれぞれ建て、皇太子の居住する東宮を東におく中国の伝統的な都城形式とは異なる独特の皇城を建造した(福田 2004: 34-67)。

皇族と支配層の住む皇城の外に位置する湖沼地帯は、積水潭^{せきすいたん}とよばれた。積水潭の積水とは大きな湖沼のことであり、海のように広いことから、積水潭は海子とも呼ばれた。明代になって、都城南郊の沼沢地を南海子と呼ぶようになると、元の子を継いだ明の積水潭は、北海子ないし西海子と呼ばれるようになった(周家楣・繆荃孫等編 2001:

444)。

外城の城内に位置づけられた積水潭は、大都を支える陸海の物流の要となり、城内外の人びとが往来する繁華街となった。湖沼地帯を2つに分割して、南半分を皇城に内包させ、北半分を一般住民に開放して大都の物流基地とし、水源もそれぞれ別にとった。元の独創性は、太液池に臨む金の太寧宮の跡地に自らの新宮殿を建築する一方、その北側の湖沼地帯を、ユーラシア大陸東部の陸海の交通幹線の交差する、物流の要として整備した点である。

元代の皇城内の太液池が、現在の南三海（北海・中海・南海）のもととなり、外城の積水潭が北三海（西海・後海・前海）のもとになった。元の大都以後、太液池と積水潭は、現在に至るまで、太液池が為政者の空間であるのに対して積水潭は一般住民の空間として使い分けられ、都城内部の湖として整備されていくことになる（図2◎元大都～㊦現在の故宮と天安門広場）。

3.3. 大都の運河と内港

元代に、江南の杭州と大都の東郊の通州を直結する大運河が新たに開削された。これを契機に、金代に開削された中都と通州を結ぶ運河を改修して、1292年から1293年にかけて、80キロ少しの長さの通惠河が開削された。完成した通惠河は、閘門によって水位を調節した（宋濂等編『元史』巻64、河渠志1976:1588-1592; 侯仁之・鄧輝1997:96-100; 王培華2005:228-255）。

通惠河は、元代を通して、通州から大都城内の積水潭に至る、交通輸送の幹線となった。大運河の物資は、通州で通惠河に入り西方の大都を目指し、大都の正門・麗正門の東にある水門から城内に入り、皇城の東側を北上し皇城北方で西に曲がり、海子橋の下をくぐって積水潭に入る。積水潭は、大運河-通惠河に接続する、都城の中につくられた内港として機能した（図2◎元大都）。

積水潭から流れでる通惠河が鼓楼大街と交差する場所に架かる海子橋（万寧橋）は、元来の木造アーチ橋から後に石造アーチ橋に改修され、現在でも使用されている。清・于敏中『日下旧聞考』巻53に引用する『元一統志』では、万寧橋は、橋の南側には皇城と宮城（天帝の御す紫微垣にかこまれた天の宮殿）があるので、銀河を象る通惠河に架かる天の（閣道）に対応するとされ、銀河を渡り天帝の宮殿につながる橋とみなされた（于敏中『日下旧聞考』巻53、城市、積水潭2001:851）。

また、モンゴル・オングート部出身の馬祖常（1279-1338）は、大都の皇城に流れこむ御溝（金水河）を天上の虹に喩え、御溝は、天上の皇城と人間の外城を結んでいると詠っている（蔣一葵『長安客話』巻1、皇都雜記2001:14）。これらは、天上界に擬えられた皇城と人間界である外城との対照性や、都城において水渠の担う象徴性をよく表している。

元代では、多数の船舶の碇泊する積水潭の北岸は、華北平原や長江流域からの物産が集積するとともに、北方草原地帯やマンチュリアの狩猟地帯、西方のオアシス都市の物産が陸路で集結する場所でもあり、ラクダや馬、船舶が一同に集まり、ユーラシア大陸の多方面の物産が交易される、城内随一の商業中心地となった（宋濂等編『元史』巻164、郭守敬1976: 3852; 王崗1994: 199-203）。

3.4. 大運河と都城の関係史

大都に見られる都城内部に大運河を引き込む構造は、7世紀初に建造された隋煬帝の洛陽城に始まり、北宋の開封、南宋の臨安へと継承された歴代の都城の伝統様式である。しかし、大運河に直結する元大都の内港・積水潭の規模は、隋唐洛陽城や北宋開封、南宋臨安の運河沿いの船舶が停泊する河港（内港）と比べると格段に大きい。

大運河の漕運を創始した都である隋唐洛陽城の城内で、元・大都の積水潭北岸に匹敵する場所を探せば、洛河北岸の漕渠沿いの立德坊（H4）の西南の新潭にあたるだろう。しかし、新潭の水が浅いために大運河からの船舶が入れなくなり、後に、その東の景行坊（J4）東南に船舶の停泊地を移した。新潭も景行坊東南の停泊地も、元大都の積水潭と比べると規模ははるかに小さい²⁵⁾（図14 唐洛陽城の都市プラン参照）。

北宋開封では、内城東南の旧宋門（麗景門）から延安橋辺りの汴河（大運河）が、大運河からの船舶の停泊地となる²⁶⁾（図15 北宋開封の都市プラン参照）。南宋臨安城では、大運河と接する、余杭水門から白洋池、塩橋河にかけての河港となる²⁷⁾（図11 南宋臨安）。

洛陽や開封・臨安における大運河からの物産を集積する河港・停泊地と比べると、自然の湖沼を巧みに利用した、元大都の積水潭の規模の大きさは群を抜いている。元大都にいたって、大運河の輸送力に依存する隋洛陽城以来の都城の構造に、革新が生じたのである。

元大都の画期性は、都城内部の内港・積水潭の北岸を中核に、モンゴル高原につながる陸路と、華北平原や江南の長江流域につながる水運とを、都城内部で初めて体系的に連結させた点にある。モンゴル帝国のユーラシア大陸規模の広がり背景に、都城内部の積水潭を核に、ユーラシア大陸東部の交通体系が再編され、陸と海につながる物産の流通が誕生することになったのである（杉山2004: 159）。

以上のように、明代になって、元の積水潭の上に銀錠橋が生まれる前提には、積水潭を内港として活用した、大都での歴史的経験があった。

3.5. 銀錠橋の誕生

元大都を代表する商業区であった積水潭は、14世紀の元末から明初の政治的混乱の中で荒れていき、かつての繁栄を失う。南京に都をおく明朝が、1368年に成立し、元

王朝が大都を放棄してモンゴル高原に退去すると、旧大都城内の積水潭は、城内外を結ぶ交通の要衝としての機能が無くなり、湖沼の浚渫もされないままうち捨てられた（蔣一葵『長安客話』巻1、皇都雜記、積水潭 2001: 12-16、于敏中等編『日下旧聞考』巻53、城市 2001: 851-853）。

荒れるにまかせて規模も縮小していた積水潭が再生するのは、15世紀初頭、明王朝の第3代皇帝について永楽帝が、南京から北京に遷都して、元代以来の旧大都城を、明王朝の都城にふさわしい都市形態に改造した時のことである（李燮平 2006: 137-148）。永楽帝の北京改造は、永楽帝の孫で第5代皇帝に就いた宣徳帝（在位 1425-1435）に継承され、明初の永楽帝と宣統帝の2人の皇帝の時代に、明北京城の改造が進み都城の骨格が完成した²⁸⁾（新宮 2004: 404-433; 潘谷西編 2001: 29-31）。

14世紀後半に、元の大都のモンゴル軍を北に追いやって明朝の軍隊が大都に進駐した際に、直ちに、元代の大都の北壁の南側に新たに北壁を造った（写真1、図2①明北京）。大都城北部は空き地となっており、遊牧民のモンゴル族の支配者たちが、狩猟や軍事訓練に用いた場所である。南側に新たに城壁を築いた主な理由は、モンゴル軍の再攻撃にそなえて城壁を複城化して強化する必要があったからである（李燮平 2006: 139-140; 李孝聡 2007: 337）。

この工事で北の城壁が南方に2.8キロほど狭まり、元大都の中心部にあった積水潭の西北部分は城外に出された。これは、積水潭西北部を護城河として利用したためであり、積水潭の形状に沿って城壁が造られたために、北壁の西北部は斜めになった（李燮平 2006: 142）。元大都の積水潭は、明代の新造の北壁によって2分割されたのである。

城内に残った積水潭は、明代では城内北辺に位置することになった。北の城壁には、新たに、西に徳勝門、東に安定門の2門が造られた。徳勝門は、西北方のモンゴル高原に至る門であったために、明代を通して、北京城西北の要衝として防衛上重要な働きをした（張光得編 2003: 99-106）。

城外になった元の積水潭を城内につなぐために、新たに、北壁の徳勝門の東に水門を造った。しかし、明代の積水潭（什刹西海）と什刹海（什刹後海・前海）は、元代に比べると水量は減り乾燥化が始まって淤塞^{おさい}していき、面積は元の半分近くまで縮小したと考えられている。

積水潭が、都市の重要な要素として本格的に再整備されたのは、上記のように、明の永楽帝と宣徳帝による15世紀初の北京改造の時である。明の建国から半世紀ちかくも時間が過ぎていた。南京から北京への遷都にともなって始められた北京の改造に際し、元末・明初の間荒れて縮小した積水潭の浚渫と、護岸整備が行われた。狭くなった積水潭は三分割され、正確な建造年代は不明であるが、2つの橋が架けられることになった。西の橋が徳勝門につながる徳勝橋、東の橋が銀錠橋である²⁹⁾。こうして、銀錠橋が誕生した。

徳勝橋が、城内外を結ぶ南北の大街の橋であったのに対して、銀錠橋は、什刹海の兩岸を往来するための橋であると同時に、什刹後海と什刹前海を結ぶ美しい景観を橋の上で堪能するための、娯楽と鑑賞用の性格を強くもっていた。

3.6. 遊牧と農業の交わる都

北京の立地上の特色は、農業-遊牧境界地帯の南縁に位置するために、遊牧地域出身の為政者の政権の拠点にも、農業地域出身の為政者の拠点にもなりうる両義性を備えていることである。

クビライによる元大都建設は、草原地帯を出て「漠地」に奠都するので、モンゴル貴族によって強烈に反対された（陳高華 1984: 66-67）。逆に、明の永楽帝が江南の応天府（南京）から遙か北方の北京に遷都する際にも、江南の官僚たちには反対の意志が強く、遷都の後も、南京への遷都^{かんと}の決定が繰り返しなされた程である（新宮 2004: 306-346）。

このように、遊牧地域の出身者にとっても農業地域の出身者にとっても、北京は、「辺境」であり、自分たちの文化圏の中枢に位置する土地では無かった。にもかかわらず、元王朝も明王朝もこの地に奠都したのは、1つには、農業地域と遊牧地域の両地域を統治しようとする政権にとって、両地域の交わる北京の他に、適地は無いからである。もう1つの理由は、遊牧地域から見ても農業地域から見ても「辺境」ではあるが、北京が、自分たちの環境適応力の許容範囲内には何とか位置していたからである。

北京は、遊牧を生業とする地域の南端にあり、また、農業を生業とする地域の北端にも位置する、2つの異なる生業の交わる地であった。この立地環境であったがゆえに、元大都は、遊牧政権の冬営地として遊牧民支配者の駐屯が可能となり、遊牧地域にある夏営地の上都と併用することで、政権の拠点にできた。逆に、明北京は、江南の農業地域出身の政権ではあるが、北京が華北平原北端の農業地域に位置するので、定住の許容範囲には入ったのである。

このような、対照的な生業が混淆できる、環境の境界に生きる都市としての北京は、遊牧地域出身の為政者の元大都から、江南出身の明北京へ交替することによって、為政者の政治的目的と趣向に即して、都市構造の細部にわたる変更が可能になるのである。元から明への交替の場合は、遊牧都市から農業都市への変更である。逆もまた可能であった。このことを、大都の江南庭園都市化、という側面から、以下叙述してみよう。

3.7. 銀錠橋と江南庭園

明初の北京改造計画の目的の1つは、モンゴル族の元王朝によってつくられた都を、明初の都城・南京城の宮城の建築構造をモデルにして、中国都城の伝統的な中国伝統の都城に改造することにあつた。そのために、皇帝の宮殿を軸とする、鐘楼—鼓楼—皇城—正陽門—天壇（東）・山川壇（西）と続く都城の中軸線を強調し、中軸線を強化する

ための皇城を東に拡張し、宮殿の改修や新たな宮殿の建築、各種国家儀礼の施設の建造など、都城の大改造が行われた（新宮 2004: 122-225; 347-384; 李燮平 2006）。

この改造によって、モンゴル色を払拭するとともに、中国の伝統的な都城理念を視覚化しようとしたのである。しかし、永楽帝時の北京改造時には、紫禁城内の三殿二宮や太廟・天壇・地壇などの国家儀礼の施設が完成しただけで、まだ北京改造は緒についたばかりであった。その三殿も 1421 年に落雷で焼失してしまい、北京の改造は、宣徳帝（在位 1426-1435）の治世を待たねばならなかった（新宮 2004: 404-433）。

宣徳帝の北京改造時、皇城の宮殿の配置を中軸線に少しでも近づけるために、1432 年に、皇城の東壁が東に拡張された。その結果、元代の積水潭から出る通恵河の流路は明の皇城内に入り、後に大部分が暗渠となって運河としては利用できなくなった（蔡番 1987: 11; 新宮学 2004: 410-412）。積水潭の北岸につくられた元代の大運河からの船舶停泊地は、明代には城外東方の通恵河に架かる大通橋付近に移された（新宮 2000: 11-49; 王培華 2005: 228-242）。

これによって、積水潭とその周辺は、大運河につながる全国の物流の基地としての役割を完全に終え、今度は、都城内の住宅地や景勝地として整備されていくことになる。銀錠橋の正確な建造年代は記録が無いために不明であるが、おそらく、15 世紀前半の宣徳帝による北京改造に際し、荒れて乾燥化した積水潭が本格的に改修され、その時に、銀錠橋が誕生したいと思われる（図 2 ㉔元大都と㉕明北京を比べよ）。

明初の工事により、元代の積水潭は、すでに城外と城内に二分されていた。この北京改造時に、城内に残った積水潭が、徳勝橋と銀錠橋の 2 つの橋でさらに三分割された。徳勝橋は積水潭と什利海（^{シーチャーハイ}十利海）を分け、銀錠橋は、什利海を、さらに什利後海と什利前海に分けた。つまり、元の広大な積水潭は、城内の西北の部分のみに元代以来の積水潭の名称を留めたのである。この城内西北部の積水潭は、什利西海ともよばれ、明清を通して、城内で最も幽邃な場所として知られた（于敏中等編『日下旧聞考』巻 54, 城市, 徳勝橋 2001: 884-885）。

積水潭の改造は、明初の都城・応天府（南京）の立地した江南の都市庭園の様式を、北京に導入することになった。おそらく、これは、都城を漢族の伝統様式に改め、モンゴル族の大都との差別化をはかる、当時の文化政策の一環をなしていたと考えられる。

また、現実問題として、温暖な江南から寒々とした華北の北京にやってきた明朝の多くの官僚にとって、南京とその周辺に華咲いた江南庭園の様式を北京に移植することは、厳しい北の生活をおくる上で、不可欠でもあった。北京の江南人は、秋になって故郷を懐かしむ時、什利海後海の龍華寺の前に広がる湖と、当時湖面に広がっていた稲田を眺めては自ら慰めたという（劉侗・于奕正『帝京景物略』巻 1, 龍華寺 2001: 37-39）。この稲田は、江南の農民を招募してつくらせたものである。稲田をのぞむ岸边には、江南人のための亭台もたてられた。北京のような北辺の地では主食は小麦であって稲では

なく、江南の秋の水郷のように、黄金色に広がる稲田を目にすることはめずらしかったのである。

什刹海に架かる銀錠橋の建造は、橋が庭園の景観を創造する江南の造園技術を、北京城内にもちこんだものである。ヒョウタンのように形づくった湖沼の細い腰の部分に、橋を建造して景観に動きを導入することは、江南庭園の伝統的な意匠の1つだった³⁰⁾。

明初は官僚たちの私的な園林造成を禁じる詔もだされたが、政府によって積水潭と什刹海が整備されるのに合わせて、湖に面する湖岸の景勝地には、王侯貴族が私的な江南風の庭園を次々と造成していき、それぞれ工夫を凝らした名園として名を知られるようになった(劉侗・于奕正『帝京景物略』巻1, 水関, 定国公園, 金剛寺, 英国公新園, 三聖庵, 崇国寺, 古墨斎, 龍華寺, 十刹海, 千仏寺, 火神廟, 英国公園 1980: 18-43)。湖と橋と庭園, 水亭で構成される, 美しい江南の庭園都市の風景が, 明代の北京城内に公私にわたって体系的に移植されたのである(張家驥 1991: 159-160)。城内の公私の庭園や別荘は, 次第に, 北京城西郊の川沿いから西山にかけて広がっていった(張家驥 1986: 156-159; 汪菊淵 2006: 545-560)。

中国庭園史を鳥瞰した上で, 大室幹雄氏は, 4世紀から6世紀にかけて, 江南の南朝において, 山水詩, 田園詩, 山水遊記, 山水画, 書法, 庭園, 園芸などが相互に密接に関連する1つの文化となり, 中国大陸の文化史を刷新していくことを論じている。その直接の背景として, 大室氏は, 江南の美しい自然の中の都城・建康の城内から, 郊外, 田園, 原野, 山々にかけて文人の居住が広がり, 自然と文化の関係が変容したことを挙げている(大室 1985a; 1985b)。

南朝で育まれたこの園林文化, あるいは, 庭園文化とでも呼ぶべき新しい文化は, 隋唐の中国統一によって華北都市にも影響をあたえていき, 特に, 隋・唐・五代・北宋の洛陽は, 決定的な影響を受け続け, 北宋の開封でも, 宮城の東北に, 太湖石を積み上げた広大な江南庭園・昆岳こんがくが造成された(図15 北宋末期の開封)。元大都の宮庭庭園も, 隋唐以来の庭園造成のモデルとなった江南庭園の影響を受けている。元大都の官人たちの個人庭園にも, 江南庭園の様式は影響をあたえた(孟亜男 1993: 139-150; 汪菊淵 2006: 263-291; 潘谷西 2001: 386-388)。

しかし, 遊牧民の支配者たちは, 宮殿を建築した後も, 元朝を通して城内や城外でテントを使用し続けた。大都では, ペルシア風の噴水をもつ庭園の存在も推測されている(福田 2004: 34-67)。モンゴルの都城・大都是, 農業-遊牧境界地帯に接する立地環境から, 中央アジアのオアシス都市としての特色と, 遊牧民の冬营地, 農業地域の都市としての特色を併せもつ複合都市だったが, モンゴルの支配者たちは, 遊牧の習慣を守り続けた。

大都の建築構成も, 皇帝の住居の周囲に禁軍が駐屯したり, 西を尊ぶモンゴルの習慣から, 皇太子の東宮を東ではなく西においたり, 太廟の大次・小次を西におくなど, 中

国の陰陽思想にもとづく建築配置を無視している。元大都は、あくまで、遊牧民の冬营地にもとづく都城だった（杉山 2004: 128-167; 潘谷西 2002: 17-21）。

明の北京改造は、このような遊牧民の都を、江南出身の支配者が農耕民の漢族の都に転換する試みであった。その意味において、北京における公私の江南庭園の造営は政治的な意味をもち、銀錠橋は、江南から生まれた明王朝を象徴する建造物の1つだったのである。

3.8. 明代の銀錠橋

以上のように、積水潭界限は、元王朝における城内外を代表する商業・金融・情報センターから、明代以後には都城屈指の風致地区に変貌した。明代の南三海は、元代と同じく皇城内の禁苑となり一般人は遊覧できず、皇城外の北三海だけが、官人をふくむ一般人に開放された。そのために、風光明媚な北三海に、人気が集まることになった。

銀錠橋の東北には、元大都の中核となった鼓楼や鐘楼が間近にあり、元王朝以来の古都の面影を残す積水潭が存在し、豊かな歴史をもつことが、この地区特有の魅力を醸しだしていた。

銀錠橋の上にとれば、東北に鼓楼と鐘楼が手に届く位置に見え、南方には、皇城や紫禁城の瑠璃色の甍や白塔が浮かび、はるか西方には、後海をとおして西山の秀峰を眺めることができた。銀錠橋から眺める西山の風景は、「銀錠観山（銀錠橋から西山を眺める）」と称され、燕京小八景の1つに数えられ、城内の湖から西山を眺望できる最良の場所とされた。

また、橋の下の水を天の川に見立て、橋を天の川に架かる天橋（閣道）のイメージに投影させる伝統思想は、銀錠橋の場合も存在した。明・胡直の「春の夜に銀錠橋を過り、禁城の外の北海子（什利海）に在り（春夜過銀錠橋在禁城外北海子）」（同著『衡廬精舍藏稿』巻5、五言律詩）には、「都城佳麗の地、春夜重慶を喜ぶ。巨浸（什利海）銀漢（天の川）に通じ、長橋（銀錠橋）碧の汀に挂かる（下略）」とある。作者の胡直は、銀錠橋を、天の川（什利海）に架かる天橋に擬えている。

明代の銀錠橋について、17世紀前半の北京の名所を記した、孫国枚『燕都遊覧志』には、次のように記されている（于敏中等編纂『日下旧聞考（2）』巻54、城市 2001: 879に引用）。

銀錠橋は、（皇城の）北安門（地安門）の海子三座橋（什利後海南岸の水渠に架かった橋）の北にある。この場所は、城内の水際から西山を眺める際の第一の絶景地である。橋の東も西も湖水で、荷や芰、菰、蒲が波間にゆれている。南方に皇城の宮殿を眺め、北方に道観の蒼天を望み、西方に城外の幾多の山なみを望む場所である。銀錠橋からは遠くの景色を遮るものなく眺めることができ、浄業寺のある積水潭（什利西海）のせまく見通しのよくないこととは異なる（銀錠橋在北安門海子三座橋之北、此城中水際看西山第一絶勝處也。橋東西皆

水、荷菱菰蒲、不掩淪漪之色。南望宮闕，北望琳宮碧落，西望城外千万峯，遠体畢露，不似淨業湖之逼且障也。

3.9. 明代の積水潭と什刹海の風景

明代の什刹後海の一部は、上述のように、積水潭に流れ込む水量が減ったために乾燥化が進んだので、国有の水田としても開拓されていた（蔣一葵『長安客話』巻1，海子2001: 16）。江南の水郷地帯を彷彿させるその稲田は、秋には一面に稲穂をたれて稲の香りが漂い、北京城に住む江南人が訪れては郷愁にひたる場所になったという（劉侗・于奕正『帝京景物略』巻1，龍華寺2001: 37-39）。

清代にも、什刹後海の西部から中央部にかけては稲田が広がっていた（清・翁方綱（1733-1818）の『復初齋文集』巻6）。しかし、什刹海の地勢に高低差があり稲を植えるのに適していないことから、清朝は、蓮の花を植えて租税することにしたという（清・鄂爾泰等編『八旗通志初集』巻68 土田志7，長春：吉林文史出版社，2002，完成1739，清・崑岡等編『大清會典則例』巻167 内務府）。

明代の什刹海西海（積水潭）・後海・前海の湖岸には、多数の公私の庭園が造成された。庭園の主人たちは、詩を詠むサークルである詩社をつくり、四季を通じて互いに往来し合っては詩を贈答し、互いの庭園を見せ合った。詩社は、政治的党派のあつまりでもあり、什刹海にのぞむ美しい景観の地は、中央政治の動向を決する政治の場でもあった。明の万暦年間（1573-1620）に京師西城指揮使についた蔣一葵は、積水潭（西海）の情景を、このように述べている（蔣一葵『長安客話』1980: 12）。

都城の北隅には、もとの積水潭があった。周囲は数里（数キロ）の広さであり、（北京西郊の）西山から流れ出る諸泉水を高梁橋（北京西郊の地名）から引水して、北水門（徳勝門の西方の水門）から城内に入らせ、ここに水をあつめたものである。積水潭の中には蓮が植えられ、蓮池と称した。池のほとりに、蓮花庵や浄業寺、王公・貴人たちが水辺に建てた水亭がつらなり、極めて静かで美しい地となっている（都城北隅旧有積水潭，周広数里，西山諸泉從高梁橋流入北水門匯此。内多植蓮，因名蓮池。池上建有蓮花庵，浄業寺，及王公貴人家水軒，水亭，最為幽勝）。

積水潭（西海）の南岸には、明朝建国の功臣・徐達（1332-1385）の府邸である広大な太師圃（定園）や、湖面が鏡のように見える劉百世の鏡園があり、西岸には、方園や蓮花社（蓮花庵）、北岸には、太平庵や浄業寺がたつ。湖岸には王公貴人の別荘や水亭がならび、湖水を引いて池をもつ庭園を造っていた。湖岸は楊やなぎの緑におおわれ、城内で最も静かで美しい場所の1つだった（同著『長安客話』巻1，積水潭1980: 12-13; 同書海子1980: 16）。

積水潭が、蓮花池の別称をもち、一面に蓮はす（荷）が植えられた様は、清代にも継承さ

れた。清・周広業『過夏統録』積水潭（統集四庫全書，上海：上海古籍出版社，1996，初版清代）に引く，明・孫国救^{そんこくきゅう}『燕都遊覧志』も，「鼓楼西斜街をぬけて銀錠橋に至り湖を眺めると，見渡す限りすべて荷の花であり，仙界のようだ」と述べている。銀錠橋から眺める風景を仙界に喩える詩は多い（徐世昌（1855-1939）の「過銀錠橋旧居」同編『晚晴移詩匯』巻32など）また，蓮は，積水潭の東の什刹海にも広く植えられており，蓮の花の開く夏には，城内の多数の人びとが遊覧のために訪れた。

積水潭（西海）と什刹後海（後海）の間の広い堤には，漫園，湜園，楊園，王園等の名園が南北にならび，銀錠橋の東南の什刹前海に張り出した場所には，英国公の新園があった（劉侗・于奕正『帝京景物略』巻1，定国公園2001:29-30;同書英国公新園31-32;『長安客話』巻1，皇都雜記2001:12）。

英国公新園は，1633年の冬，水面が凍った什刹前海で櫓遊びをしていた英国公が，銀錠橋の南方の観音庵付近に至った際に，そこからの湖の広大な景観美に打たれ，急いで土地を購入して造園したものである（劉侗・于奕正『帝京景物略』英国公新園2001:31-32）。英国公新園は，什刹海を借景に取り入れた名園として，中国庭園史の上で名高い（張家驥1991:159-160）。

また，積水潭や什刹海の周辺には，浄業寺や什刹海寺，龍華寺，広化寺，興徳寺，金剛寺，大悲寺，弘善寺，白米寺，大慈恩寺などの由緒ある寺院や，広福観，火神廟，三聖庵などがならび，城内で最も宗教施設の多い地区の一つだった。これらの建築物の多くが一般に開放されており，什刹海とともに，人びとに愛された。元大都の都市計画の中心部におかれた鼓楼や鐘楼もすぐ近くであり，什刹海から美しい姿を望むことができた（写真9参照）。什刹海の什刹（十刹^{じゅうさつ}）の名称の由来は，多くの古刹があるからともいう。

以上の建築物の多くは清代に継承された。中華民国から中華人民共和国にかけて，多くが消滅したが，現在も部分的に残存する。閑静で風光明媚な高級邸宅街としてのこの地区の特色は，明代につくられ，清朝を経て現在にいたるまで継承されているのである。

3.10. 銀錠橋界隈の四季

明代北京城内外の風物を詳細に描いた劉侗・于奕正編『帝京景物略』には，積水潭と什刹海の四季の移ろいが，以下のように記されている（同書巻1，城北内外，水関2001:19）。

毎年，初伏の日（夏至の後の第三庚）には，宮廷の馬を管理する御馬監内監が，旗と幟^{のぼり}をたて鼓吹隊を先頭に，御馬数百頭を引いて湖岸に至り，水際で馬を洗う行事があった。この洗馬の行事が元大都以来のものであることは，『日下旧聞考』巻54，城市（2001:885）に引用する，元の画家・朱德潤（1294-1365）の「内厩^{ないきゅう}の洗馬を観る」の詩から分かる。

盛夏の蓮の花が咲く季節となると、湖に臨む別荘や庭園では、蓮の花を観賞する宴会が開かれ、蓮の花が眺められない所でも、宴席が設けられて歌舞が演じられた。蓮を詠んだ詩が数多く残されている。

旧暦7月15日の中元の夜の盂蘭盆会には、積水潭や什利海の周辺の寺々の僧が集まり、湖の蓮の花の中に燈籠を浮かべる行事があり、人びとは、これを燈花ないし花燈と呼んだ。酔客は湖で遊び、燈籠を^{かも}見や雁、亀、魚の形にして流し、湖水に火がとまり蓮の葉が焼かれて花が萎えたりするほどだったという。中元の夜は、^{どら}鼓や鑢の音に乗って流れる声明と、宴会の歌声と楽器の音色が、明け方まで続いた。

秋は人なみがやや寂しくなるが、^{あし}蘆葦の日や^{ひし}菱芡の年には、湖岸の水亭で文人たちの詩会が開かれた。冬に湖水が凍ると、^{そり}氷牀を引いて湖上を駆ける。雪が降った後には、氷牀を10余り集めて湖上で酒をかわす。「月は雪に在り、雪は牀に在り」といった趣である。

什利海の四季の風景は、(杭州の)西湖の春、(南京の)^{しんわい}秦淮の夏、(洞庭湖の)洞庭の秋の景勝をあわせもち、その美しさは、江南(東南)をしのぐとまでいわれた(劉侗・于奕正『帝京景物略』巻1、城北内外、水関2001:19)。什利海に船を浮かべて遊ぶ様は、清代になっても、多くの人に江南の風景を彷彿させたのである(徐世昌編『晚晴移詩匯』巻174に引用の詩など)。現在も、什利海のボート乗り場には「江南遊覧」と記されて江南の船遊びを北京城内で味わえることが強調されている。中国華北における江南文化のもつブランド力である。

現在、什利海周辺が、北京城内を代表する観光地区として国内外に宣伝される際に、什利海の特徴として、江南の水郷のような風景美を備えていることが、しばしば言及される。このような什利海の江南化は、明代の北京改造時に始まるのである。

3.11. 清代の銀錠橋

17世紀半ばに、満洲族の清王朝が北京の新しい支配者となると、銀錠橋の界限は、支配氏族をなす満洲族の8つの軍事・社会組織である八旗のうち、^{はつき}正黄旗の軍人とその家族の駐在する地区となった。正黄旗は、黄色の旗をシンボルとする、清朝皇帝の直轄部隊の1つであり、八旗の筆頭にあげられる名門とされた。

正黄旗には、満洲・蒙古・漢軍八旗の3種類の旗があり、駐屯地は、満洲八旗が一番皇城に近い地におかれ、次が蒙古八旗であり、漢軍八旗は城壁に接する位置におかれて、各旗が棲み分けていた(『八旗志初集』巻30)。銀錠橋の界限は、満洲八旗の駐屯地に入ること、明代以来の邸宅街としての街並みに、さらに磨きをかけていった。

銀錠橋の界限は、什利海(積水潭)を管轄下におく皇室庭園管理機関(奉宸苑)の管轄地となり、清朝後半期には、皇帝の親王や宗室の官庁である王府や貝子府・貝勒府が集中する地区となった。後海の北岸には、^{じゅんしんのう}醇親王府(醇親王の王府。光緒帝、宣統帝の

2人の皇帝を輩出)、南岸には恭親王府(恭親王の王府。清代の小説『紅樓夢』の舞台である榮国府や大観園のモデルになった場所という)や、慶親王府(慶親王の王府)、漕貝勒府があり、西岸には、棍貝子府や徳貝子府がたちならび、いずれも広大な敷地をもっていた(于敏中等編『日下旧聞考』巻53, 54, 城市2001: 842-885)³¹⁾。

明清時代には、上述のように、銀錠橋の上から眺めることのできる西山の景観は、北京で最も美しい景色の1つに選ばれ、城内の人びとに愛され、多くの詩人が詩を残している。清の呉巖も、「沿銀錠橋河堤(銀錠橋のたもとで)」という詩の中で、次のようにうたっている(呉長元『宸垣識略』巻8, 内城4, 正黄旗2001: 152-153)。

沿銀錠橋河堤	銀錠橋のたもとにて
短垣高柳接城隅	湖岸の家々の低い壁と 高くおいしげる柳が 城内の片隅のこの地で接し
遮掩楼台入画図	楼閣をおおって 絵のようだ
大好西山迎落日	西山に落ちる夕陽は 誠にすばらしく
碧峰如幛水亭孤	碧色の峰々は陽を受けて重なり合い 水亭は一つ 湖水に臨む

夕陽を浴びた銀錠橋の風景をうたう詩は、他にも多く残されている。たとえば、清・宋牧仲(1634-1713)の「過銀錠橋旧居」(清・朱一新『京師坊志稿』巻上, 銀錠橋2001: 162, 初版1897に引く『燕都遊覧志』)や、清・黄釗の詩(『読白華草堂詩二集』巻8, 初版1834)などである。夕焼けに染まる絵のような西山の峰々は、城内の街路では、この銀錠橋の上でしか眺めることができなかった。

快晴の空のもと白雪におおわれた西山の連峰を銀錠橋から望む詩も、多数つくられた。たとえば、清・于敏中『日下旧聞考』に引用の明・楊榮の「西山霽雪」や同じく明・金幼孜の「西山霽雪」などである。西山霽雪は、西山積雪、西山晴雪とも称され、金・元・明・清を通して、北京を代表する景観の1つとされた。銀錠橋から眺める西山の秀峰は、城内随一の絶景を誇っていたのである。現在でも、空気の澄んだよく晴れた日には、高層ビルの傍に西山の一部が眺められる。

また、什刹海一帯は、しばしば北京の伝説の舞台となり、今も多くの伝説や伝承、昔話が伝えられている。その中でも、什刹海の名前の由来を説く、財神・沈万三の掘蔵譚(隠された宝を発掘する話)は有名である³²⁾。それによると、什刹海は、このようにして誕生した――。

什刹海は、もともとこんなに大きな湖なんかじゃなかった。永楽帝が北京城を修築した時のこと。お金が足りなくて困っていたところ、身体を叩けば宝のありかを教えてくれる財神がいることを知った。そこで、皇帝は、財神を探し出して身体を叩き、今は什刹海となっているこの場所に宝が埋まっていることを教えてもらった。次々と穴蔵を掘っては宝を取り出すことになって、10の大きな穴蔵ができた。そこに雨水がたまって、今の什刹海ができたんだ。でも、もっとお金の欲しくなった皇帝は、財神を叩き続けた。そのために、とうとう財神は死んでしまった。

什利海の利チアの発音が北京語の窖ジャオ（穴蔵の意味）と似ており、什は十に通じることから、什利海は十窖海シージャオ、すなわち10の穴蔵からできた大きな湖となって意味が通じるので、この話は、北京で広く流布したのである。

18世紀末以後になると、もともと、満洲族のみ居住をゆるされた北京内城に漢族の居住が浸透していき、正黄旗の地区であった銀錠橋界限も、満洲族と漢族の混住する地区に変わっていき、橋のほとりに漢族の商店が広がり始めて中華民国にいたる。

清朝末期の1903年に、内城の正陽門の東南に鉄道の北京駅（京奉鉄路正陽門東車站）ができた。東北の奉天と北京を結ぶ鉄道である。その結果、城内の商業中心地は、正陽門（前門）前に移行した。鼓楼前の商店街は、北京市内で最も古い商店街として営業していたが、鉄道の開通にともない、城内西北に位置する什利海周辺の地区が、城内の交通幹線からはずれて不便な場所になっていくことは避けられなかった。没落した清朝の満洲貴族の多数が居住するこの地区は、かつての高級邸宅街としての地位を失っていき、城内でも貧困化率の高い地区になっていく（Gamble 1921: 264-306）。

中華人民共和国が建国すると、この地区は、国民党幹部や共産党幹部等の上層階級の居住地区となって、再び、邸宅街として整備されていくことになった。中華民国期における城内の近代化に際して、この地区が表舞台にはならなかったために、清代の王族や満洲貴族の邸宅建築をよく留めていたことが、逆に、閑静な邸宅街としてのこの地区の価値を高めていく。

孫文の妻で中華人民共和国の中央人民政府副主席に就いた宋慶齡（1893-1981）や、文学者で政務院副総理や科学院院長を兼任した郭沫若（1892-1978）、作家の老舍（1899-1966）、京劇の名優・梅蘭芳（1894-1961）、画家の徐悲鴻（1895-1953）の四合院の邸宅はこの地区にあった。現在は、それぞれ記念館となり公開されている。また、歴史学者の陳垣（1880-1971）や思想家の梁漱溟（1893-1988）、書画家の張伯駒（1898-1982）、銀錠橋に橋名を揮毫した単士元（1907-1998）等の著名な知識人も数多く住んでいた。建国の英雄である十大元帥（朱徳・彭徳懐・林彪・劉伯承・賀龍・陳毅・羅榮桓・徐向前・聶榮臻・葉劍英）のうち3名は、銀錠橋南岸の柳陰街に居住していたという（中国語 Wikipedia 2008）。

3.12. 銀錠橋と煙袋斜街

銀錠橋から鼓楼前の商業地区にぬける、東北の小道イエンダイシエジェ（煙袋斜街）は、200m少しの長さである。現在は、各種の個人商店が軒を連ねて賑わっている。元の時には積水潭の湖水の中か湖水に直接に面する岸辺だったと思われる。

元末から明初にかけての積水潭の乾燥化によって陸地となり、明初の積水潭の改造時に、打魚庁斜街とよばれる湖の魚売りの通りになったらしい（明・張爵『京師五城坊巷衞衞集』日忠坊、2001: 19）。鼓楼に続く斜めの小道だったので、後に、鼓楼斜街（鼓楼

西斜街)とよばれるようになった(朱一新『京師坊志稿』巻上, 鼓楼西斜街 2001: 163-164)。

清代も18世紀になると、鼓楼前の商店街と繋がって、従来の閑静な小路から商店街に姿を変えだした。清・呉長元『宸垣識略』巻8, 内城4 (2001: 154)には、「今の鼓楼斜街は、途中で二手に分かれる。西北に行く街路は、鼓楼西大街に通じる。西に進んで湖の岸辺に至り銀錠橋に続く街路(現在の煙袋斜街)は、昔は西の涯はてだったが、いつの間にか、商店が軒を並べるようになり、幽静なる通りが変じて埃の舞う雑踏の巷になってしまった」とある。

このように、鼓楼斜街は、18世紀には、徐々に各種の商店が軒をつらねる商店街となっていく、銀錠橋は、鼓楼斜街を通過して東の鼓楼前に至る商業区と、銀錠橋兩岸の落ち着いた邸宅街を結ぶ役割をになうようになった。この機能は、現在にもおよんでいる。鼓楼周辺の商店街は、大都以来の歴史をもつ北京で最も由緒ある商店街の1つであり、その商店街と什利海を連結する斜めの小路は、老北京の商業的繁栄を今に伝えている。

現在の煙袋斜街の名称は、清末になってからのものである。この名称は、この界隈にすむ清朝の正規軍の満洲族の軍人(旗人)が、刻みタバコや水タバコを好み、清末にかけて、キセル(烟袋・烟袋)を売る商店(煙袋舗)が鼓楼斜街に軒を連ねるようになったためであるという。また、斜めの道のかたちがキセルに似ているからだ、との説もある(中国語版 Wikipedia 2008)。

しかし、清朝の崩壊による満洲貴族の没落の結果、中華民国期には、銀錠橋界隈の満洲貴族の家から売りに出された骨董品や書画を売る店、書画の表装専門店などの集まる街角がここに形成された。一時は、前門南の有名な瑠璃廠ルリチャンとならぶ骨董品街になったという。また、最新の流行ファッションを売る洋装店もこの街角に生まれて、城内で著名な文化街となった。

しかし、1949年に中華人民共和国建国後は、骨董品街としての街並みは次第に消えていき、文化大革命時の変動を経て、旅館や食堂、公衆浴場、理髪店、釣り道具の店などを残しながらも、静かな胡同にもどった。今は、銀錠橋界隈に観光客が集まるのに合わせて、再び、工芸品などを売る小物屋、酒場、レストラン等の建ちならぶ、城内一屈指の繁華な街角になってきた。

3.13. 銀錠橋を囲む行政地区の変遷

元の大都建造の際には、積水潭北岸一帯は、風池坊という行政区画であった。もともと、坊とは、壁に囲まれた居住区のこと、4, 5世紀以来の遊牧民の華北への侵入にとともなう治安の悪化の中で、城内の居住地区を防御し管理する目的のために、華北都市において普及したものである。このような囲壁居住区制度を、坊牆制ほうしょうと呼んでいる(妹尾 1997: 372-375)。

しかし、限られた坊門で表通りに出るのは生活上不便なので、治安が回復し商業活動が活発化する9世紀以後になると、壁は徐々に壊されていき、11世紀になると、華北の多くの都市では居住区をかこむ壁は壊されて無くなり、単に区画の名称となっていく。元の大都の坊にも、一般に壁は無かったといわれている。

明代には、積水潭・什刹海の両岸は、日忠坊とよばれる区画となり、清代には、八旗の1つの正黄旗の駐屯する区画に引き継がれた。清末には、城内行政区画の改変により、この地区は、「内右三区」（内城の西側の第三区）とよばれるようになった。

内右三区の名称は、中華民国期初期にも継承された。中華民国の首都が南京に遷ると、都をしめす名称である「京」の字は南京のみ使用できるとの理由で、北京は北平とよばれるようになり、この地区は、北平の内城五区となった。北京に都が戻る中華人民共和国になると、より大きな区画の西城区が設けられ、内城五区も西城区に組み入れられた（侯仁之編 1985; 張清常 1997）。

以上の都市区画の範囲は、時代によってそれぞれ異なるものの、銀錠橋東北の鼓楼の南の鼓楼大街が、城内の行政区画を東西に分かつ境界線になることは、元代から現在に至るまで一貫している（李燮平 2006: 305）。

3.14. 文化大革命期における混乱

この地区が大きく変貌するのは、1960年代後半から1970年代前半まで続いた、文化大革命の時である。この間に、多数の外部からの人間が移住してきて城内の人口が爆発的に増加した。もとの持ち主は多く追い出され、かつて大家族が居住していた大きな邸宅は、新たに居住した多数の小家族の住居として小さく分割されていき、多くの中庭に仮造りの部屋が増築され、邸宅街としてのこの地区は大きく変貌した。

北京城内の住宅街内に今でも残存する公衆トイレ（公廁）は、この時に各街区に設置された。それまでは、当然ながら、居住単位をなす四合院ごとに自宅トイレが存在し、明清以来の糞尿を循環させるシステムも残存していた。人口の急増と治安の乱れ、中国経済の困窮化が重なって北京城内の環境は悪化し、かつては、風光明媚な銀錠橋界隈の居住空間も、雑然とした空間に変貌していった。

この時期の混乱が収束するのは、中国の経済発展が本格化する1990年代に入ってからのことである。1990年代末から、かつての邸宅の持ち主が帰ってきて、文革期の新来の居住者に立ち退きを要請する動きが生じる。

銀錠橋南岸の千竿胡同五号にある王玉梅氏の一家の物語は、文革期から今日に至るこの地区の変化を教えてくれる³³⁾。王氏の四合院の周辺は、今でも北京の古い街並みをよく残す地区で、家の前の道も、人力車による胡同巡りのルートに入っている。現在、入場料金（20元＝約300円、2006年9月）をとって公開している四合院の1つである。

通りから門の石台をあがり、大きな門をくぐり影壁の前を左にぬけると、四合院の中

庭が現れる。中庭には、^{ナツメ シアンチュン}棗と香椿の樹が植えられている。王氏によると、北京の四合院は、中庭に立つとまわりの建物は一切見えないように設計されており、それぞれの家族が北京の空と静寂を独り占めできた。これは、政府の高官の邸宅ではない小役人の四合院でも、面積が小さくなるだけで同じ条件だったという。

王玉梅氏の話によれば、夫の^{せいとうけん}齊統暄氏は、八旗の1つの^{じょうこうき}鑲黃旗の旗人の末裔であり、夫の父は、中国の狂犬病研究の第一人者となった齊長慶である。齊長慶氏は、戦前に東京帝国大学医学部に留学し、帰国後の1918年に北平中央防疫所所長となり、中華人民共和国建国後は、衛生部所属の蘭州生物制品研究所所長に就いた。齊長慶氏の影響で、齊氏一族は今でも医者が多いという。

齊長慶氏の夫人は、「最後の皇帝」溥儀（1906-1967）の姪女（妻方の兄弟の娘）であり、愛親覚羅氏一族の和碩怡親王・溥静の血筋にあたるという。一方、王氏の母はモンゴルの氏族である。王氏自身は、北京師範大学で日本語の教師をしていた。鄧小平訪日の返礼として、1984年、3000人の日本人青年が中国に招待された際、中国側の日本語通訳も担当したとのことで、日本語はとても流ちょうである。満洲族旗人の齊氏一族は、清朝以来この地区に長く居住してきたので、家の中には、関連する資料が陳列されており、王氏は参観者に丁寧に説明をしていた。

王氏一家は、文化大革命の際に、この場所を追われて他所に移住し、文革の終了した2003年に、政府と交渉してもとの家に住む権利を認めさせ、家にもどってきた。海外に300人以上いるという齊氏の親族が金を出し合い、文革期にこの家に住んでいた数家族には、立ち退き料を支払い出て行ってもらい、四合院をも文革前の状況に修復させた。

文革期には、中庭にも家屋を増築して多数の人間が住んでいたもので、空き地はわずかの大きさだった。中庭の増築部分を撤去し、傷んだ家屋を修築して、もとの状況に復元したが、中庭にあった大きな樹は伐られてもはや復元できず残念だという。四合院の中庭や各部屋には、パソコンにつながるカメラが取り付けられてあり、世界中の齊氏一族が、いつでもインターネットで北京の実家を眺めることができるようにしている。

先日、息子の結婚式があり、清朝貴族の結婚様式にもとづき、銀錠橋の北岸の家から南岸のこの家まで花嫁花婿を輿に乗せて、結婚を祝する音楽隊を先導にパレードをした。その際のビデオを見せてもらうと、2頭の獅子舞を先頭に、胡同の路地いっばいに見物客があふれる中を、橋を越えて新郎新婦の赤い輿が進む様子が映されていた。費用はすべて1万元（約15万円）とのことである。清朝の婚姻を本格的に復元したので、もっと費用がかかると思っていたのに、意外に安価にすんだという。

3.15. 銀錠橋の今

老北京の街並みを残すこの地区は、1990年代後半には、北京城内の人びとに愛される落ち着いた場所として、徐々に再生していった。美しい景観をもつだけでなく、100

年続く焼き肉の老舗「烤肉季」^{カオロウチ}³⁴⁾や、清朝宮廷料理の厲家菜^{リージアツアイ}（現在、東京の六本木ヒルズに分店をだしている）、大衆的なモツ料理の「爆肚張」^{バオドゥジャン}といった名店が点在する場所として、城外でもよく知られていくのは、この頃からである。

ただ、銀錠橋の界隈の開発が急速に活発化するのには、21世紀に入ってからである。2003年春のサーズ（SARS、重症急性呼吸器症候群）の流行を契機に、北京域内外に室外でのオープンな食堂が急増するのにもない、湖に面した美しい景観をもつ開放的なこの地区が一躍注目されるようになったのである。

その結果、一般の民家がつぎ次ぎに商業家屋として貸し出されるようになり、2004年には、開業に8万元（120万円少し）かかるけれども、1年後には20万元（300万円少し）の売り上げを得ることができると噂される、狂騒的な商業空間となっていた。

現在では、銀錠橋の界隈は、国内外の各種の料理が食べられるオープンなレストランや、カフェ、茶館、バー等が集まる繁華な場所に変貌している。この界隈の飲食店街は、前海と後海を合わせた名称・什刹海の名にちなみ、什刹海酒吧街とよばれている。酒吧とは、酒場 Bar のことである。

かつては、洒落たレストランやカフェの集まる北京のおしゃれな街衢といえば、外国大使館の集まる旧北京城東壁の城門・建国門外の三里屯^{サンリートゥン}をさした。しかし、現在では、銀錠橋の界隈が、三里屯に匹敵する北京で最もトレンディーな場所の1つとなり、北京市民のみならず、国内外の観光客や若者が集う場所になっているのである。

北京で最も国際色豊かな街区といわれる三里屯と比較した際、銀錠橋の界隈の特色は、上述のように、明清時代以来現在に至るまで、北京を代表する高級邸宅街を背後にもつ由緒ある地区としての趣きも残している点である。

このことが、この地区が人力車の胡同ツアーの主要地となった理由である。基本ルートは、銀錠橋を通過して什刹後海の南岸と北岸をまわるルートである。ここ2、3年は、外国人のみならず国内からの観光客にも人気が高いという。人力車の車夫は、当初、この地区の住民の副業が多かったが、2005年には、多数の人力車を雇う会社組織も20ほどに達し、この地区の人力車の数も1000輛を越えた。その後、北京市西城政府によって整理されて500輛程度になり、2008年からはさらに300輛に縮減し、価格の統一や営業地区も制限等するという（『北京日報』2007年12月29日）。

ここ10数年来、中国内外の研究者による、現在北京の都市構造や住居構造、生活形態の調査が進んでいる³⁵⁾。このような現地調査によって、2008年8月の北京オリンピックを迎える北京の都市構造の変貌ぶりが、あらわになってきている。

3.16. 映画・文学・音楽の舞台としての銀錠橋

銀錠橋は、現在、北京を舞台とする映画や文学、音楽、詩の場所として、しばしば登場する。銀錠橋とその界隈は、古き良き北京を象徴するゆえに、急速に変貌する北京を

象徴する場所でもあるからである。

映画では、田壮壮監督「青い嵐」(原題「藍風箏」, 1993年)をはじめ、前田和男監督「発熱天使」(1999年)や、馬曉穎監督「世界でいちばん私をかわいがってくれたあの人^{ハスチョロー}が去った」(原題「世界上最疼我的那个人去了」, 2002年)、ハス朝魯監督「胡同の理髮師」(原題「剃頭匠」, 2006年)などが思い浮かぶ。

このうち、日本人の主人公以外の重要登場人物を、北京在住の中国人アーティストが本名で演じる実験的なドキュメンタリー風映画「発熱天使」では、失踪した友人を追って北京に来た主人公が、銀錠橋につながる煙袋斜街の実在する旅館に宿をとる。自転車で旅館への往来に渡る銀錠橋は、北京の先端を走るアート・シーンの中に、次第に深く沈潜していく主人公の姿を映し出す存在である。

2007年に日本で公開された「胡同の理髮師」では、映画の中で銀錠橋の存在が3回登場する。特に、映画冒頭のシーンでは、自転車に乗って、鼓楼大街から煙袋斜街をぬけて銀錠橋をわたり仕事にむかう、主人公の92歳の理髮師・靖奎^{チンクイ}さんの姿がでてくる。古い北京を象徴する銀錠橋とその界限が、老人理髮師の生活と物語をささえる不可欠の舞台であることをしめす、印象的な場面である(写真9)。

最近では、マレーシア生まれの華人で台湾の人気歌手・王光良^{マイケル・ウォン}の新曲(我就是我 I am who I am, 2007年)のビデオクリップと、その新曲にあわせて制作された45分の短編映画(紫色夢幻, 2007年)において、銀錠橋が鍵をなす場所として登場している。

ここでは、万里の長城や故宮といった、中国大陸の外に住む華人の心象にうったえる定番の文化シンボルとならんで、銀錠橋が、伝統中国の生活空間の象徴として現れる。銀錠橋の上で、主人公の王光良は、長城でも出会うヒロインの謎の2人の女性(白人女性と中国人女性)とすれ違い別れる。橋のもつ両義性にもとづく描写といえよう。

なお、本ビデオクリップには、クリスチャンである王光良が跪き祈る場として、北京の繁華街・王府井のカトリックの教会(東堂1655年創建)も登場しており、北京の街が、新旧の時間と空間やさまざまな人間を包みこむ、多文化社会の中国像の象徴として描かれている点が興味深い。

このように、芸能や芸術でとりあげられる際の銀錠橋のイメージはさまざまであるが、共通した要素をもっていることも確かである。すなわち、これらの作品では、銀錠橋の界限は、古い北京の記憶を留める場であるがゆえに、現代北京の破壊と創造が象徴的に生じる現場としてもとらえられており、多様な意味をになう物語の結節点として機能している。

アーティストとは、ヒトと宇宙がつながる前近代の時空を今も身体で感じ取ることができるとともに、未来の動きを先取りできる特権的な人びとのことである。現在、さまざまな分野のアーティストによって、銀錠橋が表現の場選ばれていることは、銀錠橋が、北京の過去と未来を映し出す鏡であることを示しているのではないだろうか。



写真7 銀錠橋東北のストリート・煙袋斜街 (2006年9月17日撮影)
※銀錠橋の東北のこの通りをぬけると、地安門街に出て鼓楼に続く商店街が現れる。



写真8 南岸のカフェの前から銀錠橋を望む (2006年9月17日撮影)

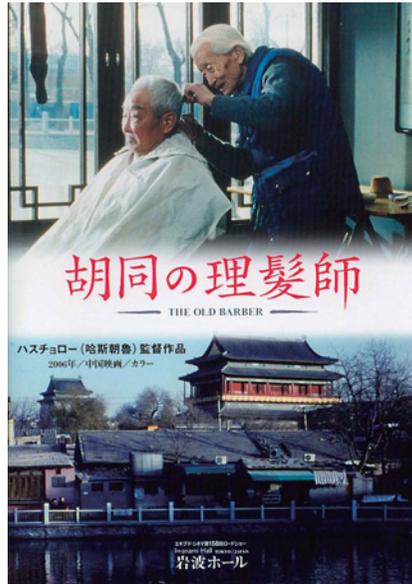


写真9 映画「胡同の理髮師（剃頭匠）」日本上映時のパンフレット（2007年、岩波ホール）。表紙下の写真は、銀錠橋東方の前海から望む鼓楼と鐘楼

比較項目 時間	世界認識の変遷	変遷の概念図	政治組織の変遷
世界史の 第1期 (～後3世紀)	I 世界の始まり	(自然)	人類の誕生
	II 人間界と自然界の創造	(人間界) — (自然界)	集落の形成
	III 超自然界の創造—王権理論の成立— 前千年紀～後3世紀：殷・周・秦・漢	(超自然界) (人間界) — (自然界)	都市と国家の形成 渭水北岸の秦咸陽宮と 南岸の阿房宮をつなぐ橋 (關道)※ただし未完成
世界史の 第2期 (4～16世紀)	IV 世界宗教の征服—王権理論の変容— 4世紀～9世紀：五胡十六国・南北朝・隋・唐	(世界宗教・超自然界) (人間界) — (自然界)	「征服王朝」の形成 隋唐洛陽・天津橋 (7世紀初)
	V 人間主義の進展—「理」の創造 10世紀～16世紀：宋・元・明	(理) (人間界) — (超自然界)	世俗的王権の形成 明清北京・銀錠橋 (15世紀初)
世界史の 第3期 (17世紀～現在)	VI 西欧近代思想の伝播と受容 17世紀～20世紀初：清	(理・西欧近代思想) (人間界) — (超自然界)	資本主義的国家の形成 上海ガーデンブリッジ (1907年)
	VII 人間界の独立 20世紀～：中華民国・中華人民共和国	(人間界)	近代国民国家の形成 南京長江大橋(1968年) ・杭州湾大橋(2008年)

図18 中国における世界認識の変遷モデル（妹尾 2008）

4 おわりに——ストリートには世界認識の変遷が宿る

本稿の分析過程を、モデルにまとめれば、図 18 のようになるだろう。中国大陸における人類の歴史は、この図のように、自然が世界のすべてであった時代から、人間界が独立していく過程といえる。本図は、縦軸に世界認識の変遷を時間順にまとめ、横軸に世界認識の変遷と、変遷の概念図、政治組織の変遷をおいて、それぞれの項目の相関性を図化したものである。

本稿では、世界認識の変遷が、道路・ストリートに凝縮されていると考えており、本図の政治組織の変遷の項目に記したゴシックの中国の都城の橋の名称は、それぞれの時期の世界認識を象徴する建築物としている。

図中の変遷の概念図は、簡潔な説明をするためモデルであるので、実証できることを帰納的にまとめたものではない。言うまでもなく、このモデルは、中国史と世界史に対する筆者の1つの解釈にすぎない。今後、批判を仰ぎながら自ら実証を進めて訂補を加え、より説得力をもつモデルを提示できるように心がけたい。

まず、縦軸の時間の区分の基準を説明したい。本図における時期区分の基準は、アフロ・ユーラシア大陸という一括りの空間が、同じ時期に同じ事件に巻き込まれたことを、時期区分の基準に置く、という考えである。

アフロ・ユーラシア大陸の歴史は、2つの歴史的事件の経験を共有している。1つは、4世紀から7世紀にかけて、遊牧民の移動を契機として大規模な人間と物産の移動が生じたことであり、2つ目は、16世紀から18世紀にかけて、西欧諸国の地球規模の海外進出を契機として、2回目の大規模な人間と物産の移動を経験したことである（図12世界史の2つの大移動期）。この2つの時期の人間と物産の移動は、技術・動物・疫病等の移動をともなっていたことでも共通する。

この2つの移動期の前後では、世界の様相は大きく異なっている。この移動期を経て、世界は、新しい局面への対応をそれぞれ模索する。2つの移動の衝撃と対応の仕方は、各地域の伝統と慣習によって異なるが、移動の衝撃を等しく受ける点で、同時代の同現象である。その意味で、今、私たち人類は、等しく、2回目の衝撃の影響下にいられていると思われる（世界史の第3期）。

次に、以上の世界史の時期区分をふまえて、横軸の世界認識の変遷・変遷の概念図・政治組織の相関と、各項目の変遷の相関を説明したい。

I 世界の始まりは、人間界も超自然界もなく、自然状況にすべてがつつまれる状況である。始原的世界であり、まだ都市は存在しない。圧倒的な自然の中にすべてがつつまれ、人間は個人ではなんの力をもたなかった時代である。人間は自然の一部であり、他の動物とも根本的な差はない。人類が誕生した時は、このような状況だったと思われる。この時点では、まだ道路は誕生しない。

Ⅱ 人間界と自然界の創造は、自然界とは異なる人間界という認識を創り出す時期のことである。人をつつみこむ圧倒的な自然の存在に対して、人が自らの存在を主張することによって生まれた。このような認識の転換を可能にしたのは、人類が、栽培植物を育てる初歩的な農業を始めたことで、採取狩猟生活から脱して定住する集落を建築したからだろう。集落は、自然の中に人間特有の居場所を人間自ら創り上げることである。しかし、人間の生活は、根本的に自然にもとづいており、自然界と人間界は不可分の関係にあり、人間界は自然界から独立する力は無かった。集落同士の交流も限られている上に、集落と集落の間に恒久的な交通路は無く、けもの道とそれほど変わらない状況だった。

Ⅲ 超自然界の創造—王権理論の成立—は、都市と国家という、集落よりも遙かに複雑な政治・社会組織を人間が生み出すことで、自然界の上に天や神々のすむ超自然界を仮構することができた時期のことである。超自然界を自然界の上に位置させることで、人間界は、自然界からの相対的自立を求めたのである。

中国大陸では、紀元前 1000 年紀から後 3 世紀にかけて、非農業者が多く居住する都市が生まれ、集落の状況を脱して、都市と都市の都市網の上に国家が誕生する。国家を組織した為政者は、天という超自然界の子であることを強調することで、政権の正統化を試みた。王権の理論がつくられ錬磨されたのは、この時である。

中国大陸では、遊牧地域に近い農業地域に、初期の都市網が形成され、その都市網の上に秦漢の古典国家が誕生した。天と人の相関を説く思想が、天命思想というかたちで体系化され、その後の王権理論の基礎となった。秦・始皇帝の咸陽、前漢・新の長安、後漢の洛陽の都市構造には、当時の世界認識が投影されている。都市と国家の形成と維持のために、恒久的な道路と橋が造られた。

ただし、人間界・自然界・超自然界は、まだ未分化であり混淆していた。ある種の動物は神であり神の子が存在し、神は半獣半人の姿で現れた。人間界の力は、まだ限られていた。人間の活動は、自然に全面的に依存しており、むしろ、異なる自然環境が物産の流通を生み出すことからうかがえるように、それぞれの環境に適応した人間の活動こそが、異なる環境にいる人びとの広範囲な交流を可能にしたのである。渭水に架ける予定だった秦の咸陽宮と阿房宮を結ぶ橋が、宇宙論的構造を備えていたのは、この時期の王権が、超自然界と自然界と人間界の交わる世界の上に成立していたからである。

Ⅳ 世界宗教の征服—王権理論の変容—は、4 世紀から 7 世紀にかけて、多くの遊牧民が農業地域に侵入して、農業-遊牧境界地帯に隣接した地域に征服王朝を建て、従前の農業地域の古典王朝の王権理論と衝突・融合しながら、新しい融合的な王権理論を創造する時期のことである。

ユーラシア大陸全域におよぶ、遊牧民の移動にともなう人間集団の大移動によって、農業-遊牧境界地帯に隣接する農業地域に軍事的拠点をおく征服王朝が誕生し、古典期

の政権は等しく打撃を受け、異なる種族や出身の人びとが混住する混乱期がおとずれ。この時期こそ、仏教やイスラーム教、キリスト教という普遍主義に立つ世界宗教が、アフロ・ユーラシア大陸に広く伝播した時期である。

既存の人間集団の上に、新たに外部から多数の人間集団が移住してきて、ユーラシア大陸には複数の征服王朝が誕生した。従来に無い複雑に錯綜する人間集団を統治しなくてはならない征服王朝は、国家宗教として普遍主義の世界宗教を利用した。同時に、世界宗教は一般民衆にも次第に広く浸透していく。そして、世界宗教の神は、従来の古典王朝期の神と対立しつつ融合し、超自然界の神々に変容をもたらした。

中国大陸では、仏教の浸透に対抗するために古来の民間信仰が体系化されて道教となり、個人の救済を目的とする仏教の教義の影響を受けて、もともと集団や共同体を救済する教えであった儒教は個人の救済の教えとして刷新される。その結果、仏教・儒教・道教の混淆する王権理論が生まれていく。宗教が個人の精神に直接浸透するこの動きは、結果的には、個人意識を強めて人間界の主体性を増加させ、超自然界と自然界の力の相対的低下を促すのである。

北魏の平城や洛陽、隋唐の長安・洛陽の都市構造には、この時期の思想の混淆性が、よくあらわれている。隋洛陽城を象徴する天津橋は、銀河に架かる橋としてイメージされたが、あくまで、洛河を渡る渡航機能をもつ橋にすぎない。秦の咸陽宮と阿房宮が、銀河をはさんで対峙する天上の神々の居住地に対応し、銀河である渭水に架けた天の橋（閣道）を渡って両宮殿が連結されるというような壮大な宇宙論は、隋洛陽城には存在しない。大運河に直結する隋洛陽城は、中国史における内陸水運の時代を切り開く都城であり、隋唐長安城に比べても、機能性と娯楽性を全面に打ちだす、ずっと世俗的な都城になっていた。

V 人間主義の展開—「理」の創造—は、大規模な人間移動が一段落し、社会の相対的な安定が訪れると、世界宗教への批判と古典文化の復興運動が、ユーラシア大陸の各地域で、ほぼ同時に生じる時期である。世界宗教以前の時代に回帰する運動が、仏教批判、イスラーム教批判、キリスト教批判の形をとって世界各地で一斉に始まるのである。

中国大陸では、仏教批判の中から、儒教と道教の力が増し、仏教思想の影響を受けた儒教の知識人が、人間界や自然界・超自然界の上に立つ概念として、新たに「理」という概念を創造する。理という大きな秩序の中に、天や皇帝、一般民衆、動植物、自然現象のすべてをつつみこむ思想である。超自然界も自然界も、この「理」の下位におかれるようになる。

これは、天や皇帝を相対化して、自分たちの価値を相対的に高める儒教知識人たちの知的戦略だったと思われる。これを、思想の世俗化と考えてよいだろう。この思想は、科挙受験という業績主義社会を生き抜く新しい儒教知識人が生み出したものである。

理の概念の創造によって、人間界は、超自然界に対しても相対的な優位性を主張でき

るようになり、人間界の独立の機運が一層すすんだ。宋代の都城の開封や臨安は、このような認識の転換が始まった舞台である。内陸水運の発達にもとづいて商業が活発化し、壁がなくなり開放的になった居住地区でくらす人びとの姿や、さまざまな階層の人びとで賑わう街角の景観の中に、このような認識の転換が刻印されている。

明代初期の北京改造によって誕生した銀錠橋は、このような、人間主義が高まり世俗的な王権が形成される時期の産物であった。銀錠橋を造る目的は、北京城内に美しい景観を造ることであり、あくまで、世俗的な欲望にもとづくものであった。同時に、江南風の庭園を造る行為自体が中国伝統文化を主張する政治的な行為でもあり、世俗的欲求と政治的行為が無理なく合致する近代的社会が訪れるのである。

Ⅵ 西欧近代思想の伝播と受容は、16世紀から18世紀にかけての西欧諸国の地球規模の海外進出を契機に、世界を一体化する経済圏が形成されだし、地球全域に拡大した人間活動の規律を、西欧近代思想に求めざるを得なくなる時代に入った時期を示している。西欧近代思想が世界の各地域で受容された理由は、1つには、征服者の特権として、世界各地の交易と交流を媒介できたために、西欧思想が異なる地域の共通言語の機能を果たし得たからだと思われる。中国大陸における最終的な人間界の独立も、西欧思想を媒介にして可能となった。

しかし、より重要な点は、アフロ・ユーラシア大陸の各地域に同じ歴史構造が存在しており、西欧近代思想と同じ思想構造をもつ社会が、ユーラシア大陸の各地域に併行して誕生していたからだと思われる。

中国大陸においては、上述のように、政治・経済・社会の世俗化が徐々に進み、中国風ではあるが、明らかに、合理主義や科学的思考法、人間主義、個人主義等と呼び得る思想や行為規範が、宋代以後に形成されてきており、中国でも、西欧近代思想の形成と併行する思想現象が見られた。rationalism 合理主義の理は、儒学の理と重なる。

新大陸が旧大陸と連結して、地球規模の経済圏の中に中国大陸が組み込まれるこの時期に、中国においても、資本主義の前段階に位置する国家が誕生するのは、当然とも言えるだろう。中国の明清時代は、地球規模の銀経済圏に中国が広く深く巻き込まれた時代であり、資本が利潤や価値を生み出す時代の始まりだった。清朝末期に、中国の富を求めてはるばると来訪したイギリス人が、上海の租界に建造したガーデンブリッジは、上海という近代港湾都市の存在を象徴するとともに、中国における近代の確立を象徴する建造物でもあった。

Ⅶ 人間界の独立は、人間界が、従来の自然界や超自然界を駆逐して、世界そのものに等しくなる時期を示している。人間界の独立は、国民の支持が政権の正当性を決定する、近代国民国家の形成という動きに端的に現れている。

清末から中華民国にかけて、中国では国民-民族国家の建築が始まり、人間界が世界の主人公になっていった。天安門広場を中核にすえた現在の北京の都市構造は、このよ

うな人間界の独立をしめす格好の事例であるといえよう（妹尾 2004）。中華人民共和国建国後の南京の長江大橋の建造や、2008年5月1日に完成した杭州湾大橋は、自然に対する国民＝人間の力の勝利として位置づけられている。

このように、橋と街路の歴史を、世界認識の変遷と関連させて振り返れば、橋と街路のもつ意味が、世界認識の変遷に応じて変貌していく様をうかがうことができる。長い歴史の中で現代都市の橋やストリートの意味をかえりみると、橋やストリートが近代社会の避難場所としての機能を増していき、近代の価値をずらし揺さぶる存在としての比重を強めているように見える。今日、橋とストリートは、近代社会から排除される人びとに残された最後のよりどころの1つである。そして、現代の橋やストリートに担わされたこのような機能自体が、近代における人間界独立の必然の産物といえるのだろう。

現代の文学や映像作品が、橋やストリートを舞台にかりて表現しようとするものを目にする時、どれだけ近代技術の粋を集めた建築物になろうと、橋やストリートが、人間界が独立する過程で失なった自然界や超自然界との交流のチャンネルを残しており、人びとが宇宙^{コスモス}に通じる扉の鍵を探し求める場でもあることを感じる。かつて人びとがそれぞれの共同体に抱かれ、人間界が自然界や超自然界と通じ、人が馬や犬や虫や木々や草花と会話ができ、身体が小宇宙^{マイクロコスモス}であった時の記憶の跡を、深い淵の彼方に求める時、今そこに橋とストリートがあるのではないだろうか。

注

- 1) 本稿では、「街路」と「ストリート（街角）」の語を、都市の歩道空間として用いている。ともに、人間や家畜、車等の通る「道路（道）」の一部である。ただし、街路とストリートの語を、厳密に使い分けている訳ではない。大ざっぱな言い方ではあるが、街路と述べる場合は、前近代の都市の歩道空間を指し、ストリートと述べる場合は、近代都市の歩道空間を指すこととする。道路（道）と呼ぶ場合は、その両者を内包する。一般に、ストリートの語には、ストリートダンスやストリートミュージシャン、ストリートカルチャーなどのように、近代社会が依拠する民衆文化を生み出す場としての意味が付与されている。同時に、近代社会が必然的に内包せざるをえない、近代の抑圧から逃れ排除されることで近代を相対化する脱近代空間としても意味づけられている。ただし、本稿では、街路とストリートの語を、厳密に近代と前近代で二分割して用いているのではない。道路は、時代の変化を先取りする場である。中国社会においても、時代の変化はまず道路において表現されるので、近代の始まりをなす11、12世紀以後の中国都市の道路に、あえてストリートの語を用いる場合がある。なお、橋は、注2)のジンメルの言葉のように、道路の一部をなし、道路の機能を集約する存在であると考えている。近代の歩道空間のもつ意味については、関根康正（2004: 472-512）の分析を参照。
- 2) ジンメルは以下のように記している。「道の敷設はいわば特別に人間的な事業なのだ。（中略）道の奇跡、すなわち運動から固定した形態ができあがり、いったんできあがると今度は運動がその固定した形態へと流れこんでいき、ついには固定した形態へと凝固していくというあの道の奇跡を、動物は作り出すことがない。この事業は橋の建設においてその頂点に達す

- る。」(ジンメル 1999: 91-92)。
- 3) 本項は、妹尾達彦「橋 (中国の)」(1995: 565-567)を増補したものである。なお、日本の橋については、同書の松岡心平「橋 (日本の)」(1995: 564-565)、西欧の橋については、同書の堀越宏一「橋 (西欧の)」(1995: 567-568)、中国の道路については、滝野正二郎「道路 (中国の)」(2008: 493-498)を参照。
 - 4) 張爵『京師五城坊巷衞衞集』(2001: 1-20)にもとづく。
 - 5) 朱一新『京師坊巷志稿』(2001: 25-278)にもとづく。
 - 6) 元と明の北京の都市構造については、北京大学歴史系『北京史』編写組編 (1999)、呉建雍・王崗・姜緯堂・袁熹・于光度・李宝臣 (1997)、孫健主編 (1996)などを参照。
 - 7) 中国の橋の建築史については、唐寰澄編 (1987)、羅英・唐寰澄 (1993)、肖旻 (2004)が、よくまとまっている。
 - 8) サハラ砂漠南縁の農牧複合地帯・サヘルにおける国家形成については、コナー、グレアム著、近藤義郎・河合信和訳 (1993)、嶋田義仁 (1992a: 93-109; 1992b: 207-236; 1995; 2001: 56-85; 2007: 88-105)、川田順造編 (1977)、岩田慶治 (2004: 81-92)、赤阪賢 (2004: 43-80)、竹沢尚一郎 (2007: 131-159)、フィリップ・カーテン著、田村愛理他訳 (2002: 48-49)等を参照。上記のカーテンの分析の特色は、アフリカ史研究者の目から世界の交易の変遷を比較史的に論じている点にあり、西アフリカの歴史的経験が、世界史の分析に活用されていることである。この点で、ダホメ王国の事例研究をよりどころに、経済人類学の世界史を構築しようとしたカール・ポランニー (Polanyi, Karl) や、西アフリカ研究から出発し、世界システム論の構築にむかったイマヌエル・ウォーラーズテイン (Wallerstein, Immanuel) と類似した学問的経歴があり、現代の学問世界における西アフリカのもつ重要性をよく物語る。
 - 9) サヘルが、サハラ砂漠の交易を媒介として、地中海の政治・経済動向と密接につながっていたことについては、私市正年 (2004) 参照。
 - 10) 鈴木裕之 (2000) は、アビジャンにおけるストリート文化の形成を分析した優れた研究である。前近代の内陸部のサヘルにおいても、アビジャン等の沿海部の都市が経験したことと同じような文化摩擦と文化接触はあったと思われるが、アビジャンのストリートで生じたような若者による文化活動自体が生まれにくかっただろう。ストリートの若者文化は、近代社会を特色づける文化の1つと思う。
 - 11) サヘルの乾燥化と貧困化が、深刻さを増してきていることは、近年、環境問題が取り上げられる際に、しばしば言及される。最近も、*National Geographic* の特集記事 (2008: 34-67) で、サヘルの現状が紹介されている。ただ、サヘルの現在の困難を指摘するだけでは、この地域の育んできた豊かな歴史が忘却されがちになる。アフリカを代表する複雑な国家形成の歴史と伝統をもつ地域の1つであるサヘルは、現代においても強い文化的発信力に満ちている。ジャズやブルースなどの現代音楽や現代美術のルーツの1つはこの地帯である。サヘルと類似した農業-遊牧境界地帯にある中国大陸の黄土高原と比較すれば、現在の黄土高原がそうであるように、サヘルの文化の豊かさと伝統の深さは、今後のアフリカや世界の文化に対して、様々な点で刺激を与え続けると思う。
 - 12) 本節の文章は、妹尾達彦「都城 (中国の)」(2006a: 517-518)を増補したものである。
 - 13) 中国古代に誕生する都市網についての詳細な分析は、江村治樹 (2000; 2005)、許宏 (2000)、佐竹靖彦 (2006)を参照。
 - 14) 本項目は、妹尾達彦 (2006b)にもとづき、最近の研究成果をふまえて、中国都城の変遷パターンを再整理したものである。
 - 15) 西アフリカの初期国家の形成に際して、イスラーム帝国の成立が直接の影響を与えたことは、

今後の研究の進展にまつ点が多いが、ユーラシア大陸の他の地域の歴史と比較した場合、蓋然性の高い仮説と思われる。嶋田義仁 (2007: 88-105) は、アフリカ全体の国家形成の背景を体系的に分析した、現時点における最もよくまとまった論考であり、多くの示唆に富んでいる。

- 16) インド亜大陸は、西北部の中央アジアの遊牧民の活動の影響を常に受け続ける地理的条件をもっている (辛島昇編 2004)。4世紀から7世紀に架けてのユーラシア大陸中央部・東部の遊牧民移動にともなう激動の影響は、5世紀におけるグプタ朝への遊牧民国家エフタルの侵入からもうかがえる。おそらく、ササン朝ペルシアの滅亡からイスラーム政権の形成に至る中央アジアの変動が、インド西北部から北部に影響を与えて、インド南部への移住と定住、海岸部への人間の進出をうながし、南部にチョーラ朝等の独自の政権が形成される契機になったと思われる。
- 17) 東南アジアという地域枠組の形成が、中国大陸における江南政権である南朝の形成と、インド亜大陸における南インドのタミール政権の形成と併行した現象であることは、今後の研究の進展が明らかにすることと思う。池端雪浦・石井米雄・石澤良昭・加納啓良・後藤乾一・斉藤照子・桜井由躬雄・末廣昭・山本達郎編 (2001) 所載の諸論文は、この問題を考える際の最新の研究成果を網羅している。
- 18) 本項目は、妹尾達彦 (1997; 2003: 53-104) をふまえ、近年の研究成果をふまえて整理したものである。
- 19) 隋洛陽城の禁苑や宮城、皇城、官人邸宅の庭園が、南朝の都城・建康を中心に生まれた、江南庭園の様式を全面的に取り入れており、隋洛陽城そのものが、江南の庭園都市を華北に造成する行為でもあったことは、唐・杜宝『大業雜記』に詳しい。杜宝『大業雜記』については、辛徳勇 (2004) を参照。
- 20) 本稿では、前注のように、都市の歩道空間を指す言葉として、前近代には街路の語を用い、近代ではストリートの語を用いてきた。道路は、前近代・近代、都市・農村の通行空間を包含する言葉としている。しかし、ストリート文化の語を、本項のように、前近代の都市の道路の文化においても使用する場合がある。これは、道路で生まれた都市文化をさすストリート文化が、前近代における都市文化の成熟とともに相当早い時期に現れる、と考えているからである。ただし、近代国家におけるストリート文化と、前近代の街路の文化には、その機能と象徴性、娯楽性において、根本的な違いがあることも確かである。近代のストリート文化は、近代社会の下位文化を形成する場であるのに対して、前近代のストリート文化には、上位文化に対抗する下位文化としてのまとまりは、長い間生まれなかった。しかし、都市化が進展し世俗化が浸透する 11, 12 世紀以後の中国大陸では、明らかに独自の下位文化が、大都市の街頭で生まれていく。15, 16 世紀には、街頭での民間の語り物から小説や演芸などの庶民文化が開花するようになる。これらの庶民文化は、儒教を中心とする上位文化とは異なる価値観をもち、中国の伝統的な社会文化の深層を形づくっていくのである (任半塘 1984: 961-985; 王国維 1997; 金文京 1992: 110-136)。北宋・開封の都市社会誌である『東京夢華録』や、南宋・臨安の都市社会誌である『夢梁録』『都城紀勝』『西湖老人繁盛録』『武林旧事』等は、北宋の都城で、都市の一般住民が都市の文化を支え育む社会が誕生した様を、生き生きとに叙述する。
- 21) 本稿の張沢端「清明上河図」は、現在、北京の故宮博物院に所蔵されている 1973 年の新裱本を影印した王虹編『榮宝齋画譜 古代編 (12) 宋・張沢端繪清明上河図』(1997) による。
- 22) この見解は、周宝珠 (1997: 172-177) に代表される。
- 23) この見解は、近年、(ジョンソン 2003: 334-314) で主張されたものである。

- 24) 元大都の歴史を概観する書として、現在も、陳高華著・佐竹靖彦訳（1984）に勝る書は刊行されていない。元大都をかこむ諸問題を簡潔にしかも情趣豊かに叙述する本書は、訳文の流麗さとあいまって、大都の魅力を見事に解き明かしている。
- 25) 洛陽の漕渠沿線の船舶の停泊地については、清・徐松〔輯〕（『河南志』漕渠 1994: 141-142）参照。
- 26) 開封の汴河沿いの停泊地については、成尋『參天台五台山記』巻4、熙寧5年10月12日条の記録に詳しい。藤善眞澄訳注（2007: 403-408）も参照。
- 27) 南宋臨安城内の運河と河港については、『淳祐臨安志』巻10、城内四河、城外諸河、『咸淳臨安志』巻21、橋道、呉自牧著・梅原郁訳『夢梁錄 1 南宋臨安繁盛記』（2000: 293-342）、陳述（2006）等を参照。
- 28) 明初期時代における北京の歴史については、新宮学（2005: 375-410; 2004）の研究が、最もよくまとまっており、問題点が整理されている。
- 29) 徳勝橋は、北壁に徳勝門が建造された際に、徳勝門に続く城内の道路の建造とともに、積水潭に架かる橋として建設されたと思われる。北京が明王朝の正式の都となる1421年に、永楽18年（1420）以前に画定された北京城内の街道のうち、河と交差する箇所には必ず橋を架け修復するようにとの詔がでている。これによると、おそらく、徳勝門に通じる城内の重要な街道にある徳勝橋は、永楽帝の統治期には建設されていたと思われる。銀錠橋の方は、通惠河が不通となって城内の整備が進む宣徳帝期に建造されたと推定されるので、2つの橋の建造の時間がずれる可能性が高い。この点は、今後さらに検討を加えていきたい。
- 30) 江南庭園の造園上の特色は、張家驥（1986）（1991）、北京科学出版社主編（1988: 897-882）、村松伸（1992）、潘谷西（2001）、王鐸（2003）、陳植（2006）を参照。特に、潘谷西（2001）は、江南庭園の造景理論を具体的にもとづいて明らかにしている。また、明代末期の1634年に刊行された許成『園冶』は、中国造園に関する体系的な理論書として知られている。明代は、都市化と世俗化の進展を背景に、江南庭園が、全国の公私の庭園のモデルとして広く受容される時代であった。
- 31) 恭王府の歴史については、恭王府管理中心編（2006: 1-378）を参照。
- 32) 金受申（2003: 113-116）、金受申著・村松一弥訳（1976: 145-153）、金受申著・川瀬正三訳（1978: 51-58）。
- 33) 王玉梅氏の話は、2006年9月17日に、筆者が王氏の四合院を訪問した際に、聞き取ったものである。
- 34) 烤肉季については、中国人民政治協商会議北京市委員会文史資料研究委員会編（1986: 125-130）に沿革が述べられている。プッシュ元大統領（父）を始め、国内外の著名人が客に名を連ねている。
- 35) 現地調査と文献研究を総合した研究書が、以下のように、次々と出版されている。中国建築都市研究会・代表陣内秀信（1996: 1-96）、陣内秀信・朱自煊・高村雅彦編（1998: 245）、藤川昌樹（2000: 131-142）、北京四合院研究会編（2008: 1-208）等であり、今では破壊されて存在しない建築物も多く、極めて貴重な調査報告となっている。

文 献

阿部謹也

2000 「道・川・橋」『中世を旅する人びと他』（阿部謹也著作集3）pp.4-25, 東京：筑摩書房（初出は1979年）。

赤坂 賢

2004 「原初の都市トンプクトゥ」関根康正編『〈都市的なるもの〉の現在——文化人類学的考察』pp.43-80, 東京：東京大学出版会。

網野善彦

2007 「境界領域と国家」『列島社会の多様性』（網野善彦著作集15）pp.91-138, 東京：岩波書店（初出は1987年）。

新宮 学

2000 「通州・北京間の物流と在地社会」山本英史編『伝統中国の地域像』pp.11-49, 東京：慶應義塾大学出版会。

2004 『北京遷都の研究——近世中国の首都移転』東京：汲古書院。

2005 「近世中国における首都北京の成立」鈴木博之・石山修武・伊藤毅・山岸常人編『近世都市の成立』（シリーズ都市・建築・歴史5）pp.375-409, 東京：東京大学出版会。

北京大学歴史系《北京史》編写組編

1999 『北京史 [増訂版]』北京：北京出版社。

北京科学出版社主編

1988 『中国古代建築技術史 (3)』台北：博遠出版。

北京燕山出版社

1996 『京華古迹尋踪』北京：北京燕山出版社。

北京市社会科学院・曹子西主編

1994 『北京通史 全10巻』北京：中国書店。

北京四合院研究会編

2008 『北京の四合院 過去・現在・未来』東京：中央公論美術出版。

Brown, D. J.

2005 *Bridges: Three Thousand Years of Defying Nature*. Richmond Hill, Ont: Firefly Books

蔡番

1987 『北京古運河与城市供水研究』北京：北京出版社。

曹子西主編

1994 『北京通史』第1巻-第10巻, 北京：中国書店。

カーテン, P.

2002 『異文化間交易の世界史』田村愛理他訳, 東京：NTT出版（原書は1984年）。

Chaudhuri, K. N. (ed.)

1971 *The Economic Development under the East Indian Company, 1814-1858*. Cambridge: Cambridge University Press.

陳高華

1984 『元の大都——マルコ・ポーロ時代の北京』佐竹靖彦訳, 東京：中央公論社（中公新書731）（原書は1982年）。

陳平原・王德威編

2005 『北京——都市想像与文化記憶』北京：北京大学出版社。

陳述

2006 『杭州運河橋船碼頭』 杭州：杭州出版社。

陳植

2006 『中国造園史』 北京：中国建筑工業出版社。

陳宗蕃編著

1991 『燕都叢考』 北京：北京古籍出版社。

コナー, G.

1993 『熱帯アフリカの都市化と国家形成』 近藤義郎・河合信和訳, 東京：河出書房新社（原書は1987年）。

出口保夫

1984 『ロンドン・ブリッジ——聖なる橋の2000年』 東京：朝日イブニングニュース社。

杜正勝

1992 『古代社會與國家』 台北：允晨文化出版社。

鄂爾泰

1739 『八旗通志初集』。

江村治樹

2000 『春秋戦国秦漢時代出土文字資料の研究』 東京：汲古書院。

2005 『戦国秦漢時代の都市と国家——考古学と文献史学からのアプローチ』 東京：白帝社。

藤川昌樹

2000 「伝統的都市の現代化における空間制御技術に関する研究——北京を事例として」 谷村秀彦ほか共著『住宅総合研究財団研究年報』26: 131-142。

藤善眞澄

2007 『參天台五台山記 上』（訳注シリーズ12-1）関西大学東西学術研究所, 吹田：関西大学出版部。

福田美穂

2004 「元大都の皇城に見る「モンゴル」的要素の発現」『佛教藝術』272: 34-67。

Gamble, S. D.

1921 *Peking: A Social Survey*. London: Humphrey Milford: Oxford University Press.

高智瑜・陳德義主編

1994 『紫气貫京華・北京卷』 北京：中国人民大学出版社。

恭王府管理中心編

2006 『清代王府及王府文化 国際学術研討会論文集』 北京：文化芸術出版社。

郭紹林

1996 「洛陽天津橋・中橋与唐代社会生活」『洛陽師專学報』1996年第6期。

韓光輝

1988 「清代京師八旗人丁の増長与地理推移」『歴史地理』6。

2006 『歴史地理学叢稿』 北京：商務印書館。

韓茂莉

2005 「中国北方農牧交錯帯の形成与气候変遷」『考古』2005年第10期：57-67。

Hibbert, C.

1989 *Venice: The Biography of A City*. New York, London: W.W. Norton.

平林章仁

1994 『橋と遊びの文化史』 東京：白水社。

侯仁之主編

1985 『北京歴史地図集』北京：北京出版社。

侯仁之・鄧輝

1997 『北京城的起源与变迁』北京：北京燕山出版社。

胡直

2005 『衡廬精舍藏稿』文淵閣四庫全書補遺，北京：北京図書館出版社。

黄釗

1834 『読白華草堂詩二集』。

伊原 弘

2003 『「清明上河図」をよむ』東京：勉誠出版。

池端雪浦・石井米雄・石澤良昭・加納啓良・後藤乾一・斎藤照子・桜井由躬雄・末廣 昭・山本達郎編

2001～2002 『岩波講座 東南アジア史』1-9巻，東京：岩波書店。

岩崎武夫

1977 「説経『さんせう太夫』と境界性」『文學』45(8):934-950。

岩田慶治

2004 「TIMBUKTU——沙漠と草原との結び目」関根康正編『〈都市的なるもの〉の現在——文化人類学的考察』pp.81-92，東京：東京大学出版会。

蔣一葵

1980 『長安客話』14，北京：北京古籍出版社。（初出は万暦年間（1573-1615））

金受申

1976 『北京の伝説』村松一弥訳，東京：平凡社。

1978 『北京の伝説』川瀬正三訳，東京：角川書店。

2003 『北京的伝説 増補本』北京：北京出版社。

陣内秀信・朱自焯・高村雅彦編

1998 『北京——都市空間を読む』東京：鹿島出版会。

ジョンソン，L.

2003 「『清明上河図』と宋代東京の歴史地理」伊原弘編『清明上河図を詠む』pp.334-314，東京：勉誠社。

辛島 昇

2004 『南アジア史』東京：山川出版社。

加藤 繁

1952 「唐宋時代の草市及び其の発展」『支那経済史考証 上巻』pp.387-421，東京：東洋文庫（初出は1933年）。

川田順造編

1997 『ニジェール川大湾曲部の自然と文化』東京：東京大学出版会。

川勝守

1989 「中国の橋の史料——金石文と地方志」『生産と流通の考古学 横山浩一先生退官記念論文集 I』pp.519-546，横山浩一先生退官記念事業会。

1999 『明清江南市鎮社会史研究』東京：汲古書院。

金文京

1992 「詩讖系文学試論」『中国——社会と文化』7:110-137。

私市正年

2004 『サハラが結ぶ南北交流』（世界史リブレット60）東京：山川出版社。

興亜院華北連絡部政務局調査所編

1940 『乾隆京城全図』全17冊，北京：興亜院華北連絡部政務局調査所。

崑岡等編

1991 『大清會典則例』北京：中国蔵学研究（初版は清代）。

李孝聡

2007 『歴史城市地理』済南：山東教育出版社。

李燮平

2006 『明代北京都城城営建叢考』北京：紫禁城出版社。

劉秋霖他編著

2006 『老北京の伝説（招牌・招幌・市井）』北京：中国文聯出版社。

劉侗・于奕正

2001 『帝京景物略』（北京古籍叢書）北京：北京古籍出版社（初出は1635年）。

劉致平著・王其明増補

2003 『中国居住建築簡史——城市，住宅，園林（第2版）（附：四川住宅建築 云南一顆印）
精裝』北京：中国建築工業出版社。

羅英・唐寶澄

1993 『中国石拱橋研究』北京：人民交通出版社。

茅以升

1986 『中国古橋技術史』北京：北京出版社。

孟亜男

1993 『中国園林史』台北：文津出版。

Meyer, J.

1991 *The Dragons of Tiananmen: Beijing As a Sacred City*. Columbia, S.C.: University of South Carolina Press.

三浦基弘・岡本義喬

1998 『橋の文化誌』東京：雄山閣。

宮本正興・松田素二編

1977 『新書アフリカ史』東京：講談社。

宮本一夫

2005 『中国の歴史01 神話から歴史へ——神話時代 夏王朝』東京：講談社。

村松 伸

1992 『書齋の宇宙——中国都市的隠遁術』東京：INAX 出版。

中野美代子

1989 「北斗の城」『仙界とボルノグラフィー』pp.94-120, 東京：青土社。

Naquin, S.

2000 *Peking: temples and city life, 1400-1900*. Berkeley, Calif. : University of California Press.

National Geographic

2008 Africa's Ragged Edge, Journey to the Sahel. *National Geographic*. April, pp. 34-67.

Needham, J.

1971 *Science and Civilisation in China (vol. 4 Part 3); Civil engineering and nautics*. Cambridge: Cambridge University Press.

日本ナショナルトラスト編

1984 『季刊自然と文化〔特集〕橋』1984年夏号, 東京: 日本ナショナルトラスト。

野上素一

1956 「彼岸の世界の橋」『京都大学文学部五十周年記念論集』14: 1039-1069。

岡田英弘

2004 『中国文明の歴史』東京: 講談社(講談社現代新書1761)。

岡村秀典

2005 『中国古代王権と祭祀』東京: 学生社。

岡 大路

1943 『支那庭園論』東京: 彰國社。

大室幹雄

1985a 『園林都市——中世中国の世界像』東京: 三省堂。

1985b 『西湖案内——中国庭園論序説』東京: 岩波書店。

愛宕 元

1993 「唐代の橋梁と渡津の管理法規について——敦煌発見『唐水部式』残巻を手掛かりとして」梅原郁編『中国近世の法制と社会』pp.39-72, 京都: 京都大学人文科学研究所。

太田静六

1980 『眼鏡橋——日本と西洋の古橋』東京: 理工図書。

潘谷西編

2001a 『中国古代建築史 元・明建築 第4巻』北京: 中国建築工業出版社。

2001b 『江南理景芸術』南京: 東南大学出版社。

潘谷西

2002 「元大都規画并非復古之作——対元大都建城模式的再認識」于倬云・朱誠如主編『中国紫禁城学会論文集』第2輯, pp.17-21, 北京: 紫禁城出版社。

任半塘

1984 『唐戲弄』(下) 上海: 上海古籍出版社。

佐野賢治

1990 「橋の象徴性——比較民俗学的一素描」竹田旦編『民俗学の進展と課題』pp.413-439, 東京: 国書刊行会。

佐竹靖彦

2006 『中国古代の田制と邑制』東京: 岩波書店。

関根康正

2004 「都市のヘテロトポロジー」関根康正編『〈都市的〉なるものの現在——文化人類学的考察』pp.472-512, 東京: 東京大学出版会。

妹尾達彦

1987 「唐代後半期の長安と伝奇小説——『李娃伝』の分析を中心にして」『日野開三郎博士頌寿記念論集』pp.476-512, 福岡: 中国書店。

1995 「橋(中国の)」黒田日出男責任編集『歴史学事典3 かたちとしるし』pp.565-567, 東京: 弘文堂。

1996 「都市の文化と生活」谷川道雄他編『魏晋南北朝隋唐史の基本問題』pp.365-442, 東京: 汲古書院。

1997 「唐代洛陽城の官人居住地」『東洋文化研究所紀要』133: 67-111, 東京大学東洋文化研究所。

- 1999 「中華の分裂と再生」樺山紘一等編『岩波講座 世界歴史 9 中華の分裂と再生』pp. 3-82, 東京：岩波書店。
- 2001 『長安の都市計画』東京：講談社。
- 2003 「唐代洛陽——新しい研究動向」ソウル大学東亜文化研究所編『中国都市構造と社会変化 東アジア学術研究叢書 2』pp. 53-104, ソウル：ソウル大学出版部。
- 2004 「首都と国民広場——現代北京における天安門広場の建築」関根康正編『〈都市的〉なるものの現在——文化人類学的考察』pp. 272-317, 東京：東京大学出版会。
- 2005a 「前近代中国王都論」中央大学人文科学研究科編『アジアの社会と国家』pp. 183-229, 東京：中央大学人文科学研究科。
- 2005b 「世界都市長安における西域人の暮らし」『シルクロード学術研究叢書』9 pp. 21-99, 奈良：シルクロード学術研究センター。
- 2006a 「都城（中国の）」『歴史学事典』12 巻 517-518, 東京：弘文堂。
- 2006b 「中国の都城と東アジア世界」鈴木博之他編『都市・建築・歴史 1 記念的建造物の成立』pp. 151-222, 東京：東京大学出版会。
- 2007 「天と地——前近代の中国における都市と王権」大阪市立大学大学院文学研究科 COE・大阪市立大学重点研究共催シンポジウム報告書『中国の王権と都市——比較史の観点から』pp. 5-43, 大阪・大阪市立大学大学院文学研究科・都市文化研究センター。

斯波義信

- 1988 『宋代江南経済史研究』東京大学東洋文化研究所, 汲古書院。
- 1993 「大運河のインパクト」『しにか』4 (7): 10-15。
- 2002 『中国都市史』東京：東京大学出版会。

史 明正

- 1995 『走向近代化的北京城——城市建设与社会变革』北京：北京大学出版社。

嶋田義仁

- 1992a 「サヘル民族と文化」門村浩・勝俣誠編『サハラのほitori——サヘル自然と人びと』pp. 207-236, 東京：TOTO 出版。
- 1992b 「サハラ・サヘルの「内陸化」と「後進性」」門村浩・勝俣誠編『サハラのほitori——サヘル自然と人びと』pp. 93-109, 東京：TOTO 出版。
- 1995 『牧畜イスラーム国家の人類学——サヴァンナの富と権力と救済』京都：世界思想社。
- 2001 「サハラ南縁のイスラーム都市」嶋田義仁他編『アフリカの都市的世界』pp. 56-85, 京都：世界思想社。
- 2007 「多様な王国の歴史と動態」池谷和信・佐藤廉也・武内進一編『朝倉世界地理講座——大地と人間の物語 11 アフリカ I』pp. 88-105, 東京：朝倉書店。

Skinner, G. W.

- 1977 *The City in Late Imperial China*. Stanford : Stanford University Press.

シュライバー, H.

- 1962 『道の文化史——一つの交響曲』関楠生訳, 東京：岩波書店。

ジンメル, G.

- 1991 「橋と扉」『ジンメル・コレクション』北川東子編訳・鈴木直訳, pp. 90-100, 東京：筑摩書房（ちくま学芸文庫）。

宋濂等編

- 1976 『元史』北京：中華書局（初出は1369年）。

宋犖

1973 『西陲類稿』 臺北：臺灣學生書局。

相田 洋

2005 「中国における橋と境界」『中国史学』15: 143-169, 中国史学会。

Strand, David

1989 *Rickshaw Beijing: City People and Politics in the 1920s*. Berkeley: University of California Press.

蘇秉琦

1997 『中国文明起源新探』 香港：商務院書館。

杉村勇造

1966 『中国の庭』 東京：求龍堂。

杉山正明

2004 『モンゴル帝国と大元ウルス』 京都：京都大学学術出版会。

孫健主編

1996 『北京古代經濟史』 北京：北京燕山出版社。

鈴木裕之

2000 『ストロートの歌——現代アフリカの若者文化』 京都：世界思想社。

高村雅彦

2000 『中国江南の都市とくらし——水のまちの環境形成』 東京：山川出版社。

竹沢尚一郎

2007 「『中世』西アフリカにおける国家の起源——生態資源、交易、考古学」印東道子責任編集『資源人類学7 生態資源と象徴化』pp. 131-159, 東京：弘文堂。

滝野正二郎

2008 「道路（中国の）」横山絃一責任編集『歴史学事典15 コミュニケーション』東京：弘文堂。

唐寰澄編

1987 『中国古代橋梁』 北京：文物出版社。

唐宋運河考察隊編

1986 『運河訪古』 上海：上海人民出版社。

湯用彬・陳声聡等編著，鐘少華点校

1986 『旧都文物略』 北京：書目文献出版社。

脱脱等編

1975 『金史』 北京：中華書局（完成1345年）。

上田 篤

1984 『橋と日本人』 東京：岩波書店。

Victor F. S. Sit

1995 *Beijing: the nature and planning of a Chinese capital city*. Chichester: Wiley.

ボーゲル, E.

1991 『中国の実験——改革下の広東』 中島嶺雄監訳，東京：日本経済新聞社。

王彬・徐秀珊

2004 『北京街巷図志』 北京：作家出版社。

王鐸

2003 『中国古代苑園与文化』 武漢：湖北教育出版社。

- 王崗
1994 『北京通史 第5卷』北京：中国書店。
- 王国平
2006 『杭州運河橋船碼頭』杭州：杭州出版社。
- 王国維
1997 『宋元戲曲考』井波陵一訳，東京：平凡社
- 汪菊淵
2006 『中国古代園林史 上・下』北京：中国建筑工業出版社。
- 王培華
2005 『元明北京建都与粮食供应——略論元明人們的認識和实践』北京：北京出版社出版集团文津出版社。
- 王偉杰・任家生・韓文生・馬振玉・李鉄軍編
1989 『北京環境史話』北京：地質出版社。
- Wheatley, P.
1971 *The pivot of the Four Quarters: A Preliminary Enquiry into the Origins and Character of the Ancient Chinese City*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- 翁方綱
1974 『復初齋文集』（清代稿本百種匯刊）台北：文海出版社（初版は清代）。
- 吳長元
2001 『宸垣識略』卷8，内城4，正黄旗，北京：北京古籍出版社（初版は1788年）。
- 吳建雍・王崗・姜緯堂・袁熹・于光度・李宝臣
1997 『北京城市生活史』北京：開明出版社。
- 吳自牧
2000 『夢梁錄 1 南宋臨安繁盛記』梅原郁訳，東京：平凡社（東洋文庫674）（初版は南宋）。
- 辛德勇
2004 『兩京新記輯校・大業雜記輯注』西安：三秦出版社。
- 許宏
2000 『先秦城市考古学研究』北京：北京燕山出版社。
- 徐世昌
1990 『晚晴簃詩匯』北京：中華書局（初版は清代）。
- 徐松
1994 『河南志』北京：中華書局（初版は元代）。
- 徐兆奎・韓光輝
1998 『中国地名史話／中国文化史知識叢書』北京：商務印書館。
- 家島彦一
1991 『イスラム世界の成立と国際商業——国際商業ネットワークの変動を中心に』東京：岩波書店。
1993 『海が創る文明——インド洋海域世界の歴史』東京：朝日新聞社。
2006 『海域から見た歴史——インド洋と地中海を結ぶ交流史』名古屋：名古屋大学出版会。
- 山本 宏
1991 『橋の歴史——起源1300年ごろまで』東京：森北出版。
- 嚴文明
2000 『農業發生与文明起源』北京：科学出版社。

嚴文明他編

2004 『中国文明的形成』北京：新世界出版社。

楊寬

1993 『中国古代都城制度史研究』上海：上海古籍出版社。

楊銜之

1958 『洛陽伽藍記校注』卷3，城南，pp.159-173，上海：上海古籍出版社。

横井 清

2005 『河原と落書・鬼と妖怪』『朝日百科・日本の歴史〈新丁増補〉5』pp.34-64，東京：朝日新聞社。

吉沢誠一郎

2002 『天津の近代——清末都市における政治文化と社会統合』名古屋：名古屋大学出版会。

于敏中等編

2001 『日下旧聞考』北京：北京古籍出版社（初版は1774年）。

于傑・于光度

1989 『金中都』北京：北京出版社。

張光得編

2003 『明清北京城垣和城門』石家莊：河北教育出版社。

張光直・徐蘋芳

2004 『中国文明的形成』北京：新世界出版社。

張家驥

1986 『中国造園史』ハルビン：黒竜江人民出版社。

1991 『中国造園論』太原：山西人民出版社。

張爵

2001 『京師五城坊巷衢集』日忠坊，北京：北京古籍出版社（完成1560年）。

張清常

1997 『北京街巷名称史話——社会語言学的再探索』北京：北京語言文化大学出版社。

張宗平・呂永和訳

1994 『清末北京志資料』北京：北京燕山出版社

中国建築都市研究会・代表陣内秀信

1996 『中国北京における都市空間の構成原理と近代の変容過程に関する研究（1）（2）』東京：財団法人住宅総合研究財団。

中国人民政治協商會議北京市委員会文史資料研究委員会編

1986 『馳名京華的老字号』北京：文史資料出版社。

周広業

1996 『過夏統録』（統集四庫全書）上海：上海古籍出版社（初版は清代）。

周家楣・繆荃孫等編

2001 『（光緒）順天府志』北京：北京古籍出版社（初版は1886年）。

周星

1998 『境界与象徴——橋和民俗』上海：上海文芸出版。

朱一新

2001 『京師坊志稿』北京：北京古籍出版社（初版は1897年）。

朱祖希

2007 『営国匠意——古都北京の規画建説及其文化淵源』北京：中華書局。

